『よく聞いて下だすつた。私わ元此先の村に、長らく住んで居た者ですが、亭主が人に頼まれて、都え買物に出かけた途中、追剝に會つてそのお金を、みんな取られてしまつたのを、何か亭主が嘘を言を云つて、自分で取つてしまつた樣に、村の者から疑われて、いくら辨解をしても通らず、とう〳〵村を追出されてしまつたのです。』

『やれ〳〵まアお氣の毒な……』

『それから仕方がありませんから、此山の彼方の村え、家中引越してしまいましたが、元より村を追い出されました時、田地も何も取上げられてしまい、お金も澤山わ持ちませんでしたので、それからわ段々貧乏して、遂にわ御覽の通り、乞食同樣の姿に成りますと、其處えまた亭主わ、此間中から病氣に成り、子供わ年が行きませんし、家に稼ぐ者が居りませんので、尙の事困りまして、此年暮わもう越す事が出來ず、此分でわ又今度の村も、夜逃をしなければ成りますまい。』

『ほんとにまア、何と云う事でしよう。で、今日わ何處え行つたんです?』

『元居ました村にわ、まだ亭主の弟が、世帶を持つて居りますから、實わそれえ行きまして、お金を借りようと思つたのです。所がお前さん、その女房と云う者が、まことに不人情な女でして、いくら私が頼みましても、鐚一文貸してくれませんから、それで又仕方が無く、是からすご〳〵歸る所です。』

と、段々話して居る中に、よく其顏を見て居りますと、何うも昔時泊めて貰つた時、お菓子を風呂敷包え入れてくれた、あの女房さんに似て居ますから、太郎わ又言葉を改めて、

『若しやお前さんわ、今ら十五年ほど前に、旅の小兒を一晩泊めて、翌日立つて行く時に、そつとその包の中え、お菓子を入れてやつた事わありませんか?』

と、云つて聞きますと、婆さんわ少し考えて居ましたが、やがて思い出しまして、

『ほんに、そう云う事もありましたよ。而も丁度その時が、亭主の都え行つた留守で、あれから二日と經たない中に、村を追い出されてしまつたのです。

『おゝ、そんなら矢張りあのおばさんでしたか。』

『えツ、何ですつて?』

『お婆さん、忘れましたか。あの時の旅の子供わ、これ、この太郎ですよ、私ですよ。……私わあの時のお菓子の事わ、今だに決して忘れやしません。私わほんとうにあのお庇で、命を助かつたと云つても可いのです。』

と、是からあの森の中の事を、詳しく話して聞かせますと、婆さんも初めて思い合わせて、

『やれ〳〵そうでしたか、ほんとにあの時の小僧さんが、こんな立派な旦那に成つたのかねエ……』

と、不思議そうに太郎の顏を、暫らくじつと見詰めて居りました。其中に太郎わ又、

『お婆さん! 久し振でお目に掛つて、私も嬉しくてたまりません! 今日わ是非泊つていつて下ださいな! あの時のお禮に、何か御馳走しましようから。』

と、云いましたが、婆さんわ聴きませんで、

『いや、その御親切わ有難いが、自家で亭主や子供が、さぞ待つて居ましようから、今日わ御免を蒙りましようよ。』

と、云うので太郎も仕方が無く、

『成る程それわ御道理です。それぢやア強いて止めませんが、その代り……失禮ですが、これわあの時のお禮の印、何卒持つて行つて下ださい！』

と、お金を十圓ほど紙に包んで、婆さんに渡そうとしましたが、婆さんわ手を振つて、中々それを取ろうとしません。

『何をなさるんです。成る程貧乏わして居ますが、たつた一晩の御宿やら、たつた一つの御饅頭を、今更恩に着せてからに、お前さんにお金を貰おうなどゝ、そんな事わ決して思いません。……元の村え借りに行つたのも、つまり親類なればこそ……それさえお金を貸せなどとわ、よく〳〵で無ければ云えません。……それに他人のお前さんに、何でお金を貰えますものか。何卒それわ納めて下ださい！』

『まアそんな事云わないで、何卒取つて下ださいな！　それで無いと私の氣が、どうも濟まなくつて困ります。』

『いゝえ、如何しても取られません。もうわたしわ參りましよう。』

と、果わ振り切つて行こうとしますので、太郎わ周章てゝ袖を捉え、

『それぢやア如何しても取つて呉れませんか？』

『え……、如何御無用にして下ださい！』

『そ、そんなにお云いなさるなら、もうこれわ上げますまい。その代りお婆さん、他の物なら取つて下ださいますネ？』

『他の物とわ？』

『私がお菓子を貰つたのですから、その御返禮に私からも、おんなしお菓子をあげようぢやありませんか。ね、そんなら取つて下ださいましよう。』

と、理詰めに云われて見ますと、婆さんももう強情わ張れず、

『そうです……只お菓子を下ださるなら、子供の土産に頂きもしましよう。』

『おゝ、取つて下ださるか、それわどうも有難い。でわ少し待つて下ださい！』

と、急いで奥え行きましたが、暫くして太郎わ、大きな御饅頭を一個、紙に包んで持つて來て、

『さあ、それでわあの時も一個でしたから、私も一個しかあげませんよ。何卒これを持つて行つて下ださい！』

と、云つて出しますと、婆さんわ喜んで、

『おゝこれわ見事な御饅頭……定めし子供が嬉しがりましよう。それでわ頂いて行きますよ。……

どうも有難う御座いました。』

と、よう〳〵の事でそれを納めて、婆さんわやがて出て行きました。

後見送つて太郎も、漸う氣の濟んだ樣に、莞爾して内え入りました。

其うちに婆さんわ、自分の家え歸りますと、家でわ子供が待ち兼ねて、

『はやく御土産を頂戴！』

と、膝え取り付いて來ますから、婆さんわ直ぐに御饅頭を出して、

『さ、こんな好い物を貰つて來たから、大人しくして遊ぶのだよ。』

と、其儘子供に渡しまして、暫らく戸外え遊びにやり、さて亭主にわ、お金の出來なかつた事を話して、二人がさも力無さそうに、溜息を吐いて居りますと、小兒があわてゝ歸つて來て、

『やア阿父さん、阿母さん！　御饅頭の中からこんな物が出たよ。』

と、云いながら、持つて來たのを見ますと、こわ如何に十圓の金貸！

さてわ先刻の太郎が、只でわ如何しても取らないのを見て、わざとこの菓子の中に入れ、私達にこのお金を惠んでくれたに相違無いと、茲に始めて解りましたが、それ程迄に思つてくれるものを、此上返してわ濟むまいと、とう〳〵この金子を納めまして、これで漸く一家の者も、無事に年を越す事が出來ました。

蝶々丸

あ

ついう〳〵夏の日の事です。太郎に二郎と云う兄弟わ、各自に蟲捕の網を持つて、御庭で遊んで居りましたが、やがて大きな奇麗な蝶々が、一匹飛んで來ましたので、兩人して追かけました。

『やア其方え行つた〳〵？』

『兄さんまた彼方だ〳〵？』

と、其處の植込や彼處の花壇を、頻りに追廻した揚句、とう〳〵生垣で捕えてしまいました。

捕えてから尚よく見ますと、羽根わ五色に染つて、胴にわ金銀の光がある、いかにも珍らしい立派な蝶々ですから、兩人わ大喜悦で、直ぐに自家え持つて歸えり、それから例もの

額に刺そうと、用意の針を持ち出しまして、蝶々を殺してしまおうと思いました。

其の時二郎わ、蝶々の羽根を挟み、太郎が針を持ち出して、付けて、蝶々の背を刺そうとします と、如何した弾みか蝶々の羽根わ、スツと四枚とも抜けてしまつて、其の後の胴計りが、平氣でフワ〳〵と飛び揚り、其の儘窓から逃げて行きますから、兩人わ吃驚して、

『それ逃がすな〳〵！』

と、後から續いて追かけました。

其間に羽根のない蝶々わ、ヒラ〳〵と宙を飛んで、彼方の花壇の中え入りましたから、

『占めた早く行つて捕まえろ！』

と、云いながら其處え飛び込んで見ますと、こわ如何に！確かに今入つた蝶々わ、影も形も見えませんで、其代りに立派な行裝をした、可愛らしい男兒が一人、ちやんと立つて居りますから、此方の兩人わ二度吃驚。

『やア、今の蝶々が化けたのか知ら？』

『全體、君わ何處の兒だえ？』

と、急いで兩方から聞きますと、其兒わニツコリ笑いながら、

『蝶々が化けたのぢや無い、私が蝶々に化けて居たのだ！』

と、云いますから、此方わいよ〳〵不思議になり、

『ナニ、君が蝶々に化けて居たつて？　こりや變だ。ぢやア君わ何者だ？』

『魔法使の坊ちやんか、それとも何かに呪われたのか。』

と、云つて又聞きますと、その子わ少し涙組んで、

『何を隱そう、私わ立派な華族の兒で、蝶々丸と云う者ですが、不圖した事で十年前から、魔法使に呪われて、蝶々の姿に爲れて居たのです。』

と、さも悲しそうに云いますから、太郎も思わず側え進み寄つて、

『それぢやア華族の坊ちやんなのですか。……それが又、何だつて魔法使に呪われて、蝶々なんぞに爲れてしまつたんです？　關わなけりや話して下だ』

と、迫つて問いかけますと、蝶々丸わ溜息を吐いて、

『それぢや今話しますから、君達よく聞いて下ださいな！』

と、云いながら側にあつた、ベンチに腰をかけますから、此方の兩人も一所に坐に着いて、熱心に耳を引立てました。

『一體私わ、此處からわずつと遠くの、もう此世界とわ緣の離れた、羽根がなければ飛んで行かれない處の、雲の中の國に居る、華族の一人息子なのです。

幼小さい時から阿父さまや阿母さまに、此上もなく可愛がられて、日の光の衣服に、月の雫の乳を呑んで、荒い風にも當てられない、まことに幸福な身分でしたが、只阿父さまという人が、性來

慾が深くて、慈悲の心わ露ほどもなく、手暴い事が好きであつたばかりに、その應報が私え來て、こんな身の上になつてしまつたのです。それで私が三歳の時、或日阿父さまに連れられて、御門の外で遊んで居りました。處えやつて來ましたのわ、ボロ〳〵した行裝をした、汚い乞食の老爺でした。

乞食老爺わ私達を見ますと、直ぐに憐れな聲をして、

『何卒一文頂かして下ださい！　御旦那樣や！　若樣や！　今朝から御飯を頂きません、何卒御餘りを遣つて下ださい！』

と、泣く樣にして賴みました。

其時私わ、子供心にも可哀そうに思つて、手に持つて居た御菓子を直ぐに乞食に遣ろうとしますと、阿父さまわ頭を振つて、

『いや〳〵遣るにわ及ばん。そんな乞食に相手に成るな。』

と、云つてお止めなさいますから、私もよしてしまいますと、今度わ阿父樣の方え行つて、

『どうかそんな事仰有らずに、何でもよろしいから頂かして下ださい！』

と、云いますと、阿父樣わ腹を立てゝ、

『えイ五月蠅い老爺だ。貴樣のような汚い奴わ、乃公の邸宅え來る事ならん。はやく出て行け〳〵！』

出て行かんと撲ち殺すぞ！』

と、恐ろしい劍幕で、杖で乞食を撲り付けました。そうすると乞食わ、さも恨めしそうに、阿父樣の御顏をじつと見詰めて居りましたが、やがて火の樣な息を吐いて、

『さて〳〵噂に聞いた通り、汝わよく〳〵邪見な奴だな。よし、その返報にわ汝の寶を、今日から乃公が預つて、乃公同樣の乞食にしてやる。』

と、云いながら私の身體を、一打ち打つたと思いますと、其まゝ私わ氣絶してしまい、やゝ多時して目を明けて見たら、何時の間にか私の身體わ、一匹の蝶々に成つてしまいました。

それからというものわ、もう自家え歸る事が出來ず、此方の木葉で露を貰い、彼方の草花で蜜を貰いまして、ほんとに私わ乞食同樣、その間にわ又、惡い鳥に追かけられたり、惡戲な猫に嘲弄われたり、それわ〳〵辛い、悲しい、苦しい感をして、今日までとう〳〵十年間、毎日泣いてばかり居りました。』

と、云いかけてワツと突伏しましたので、流石腕白盛りの兩人も、吾知らず貰泣をして、一所に涙を啜り初めましたが、中にも太郎わ震え聲をしながら、

『ほんとにそれわ、可哀そうな話ですねエ。……ですが、それを、又今日わ、何うして元の姿に復ることが出來たんでしょう？』

と、聞きますと、蝶々丸わ涙を呑込んで、

『さ、それわ私にも解りません。けれども唯不思議な事にわ、先刻お庭でお前さん達に、私が追れて逃げる時、誰だか知らないが老人の聲で、

『逃げるな〳〵蝶々丸！　逃げずに素直に捕まれよ、逃げずに素直に捕まれば、元の姿に復れるぞ。』

と、私の耳の側え來て、こんな事を云いましたから、

『はてな、それぢやア捕つてもいゝのか知ら、捕つたら助かるのか知ら？』

と、半分わ疑ぐりながら、わざと捕えられたんです。

するとお前さん達わ、大喜悦で自家え連れてつて、直ぐに針を刺そうとするから、私わ膽を潰しまして、

『やア大變だ！　これぢや矢張り殺されるのか、あゝ如何したら可かろう、早く逃げたいものだなア。』

と、思つて羽根を動かしましたら、不思議に羽根がスツと拔けて、其まゝこんな所え落ちてしまい、そして自分わ何時の間にか、又元の人間に成つたんです。ほんとにまるで夢の様です。』

と、云うのを聞きまして、

『それわどうも可怪しいねエ。……だが何にしても人間に成れば、こんな目出度い事わない。もう心配する事わ無いから、今日から僕達のお友達になつて、一所に自家え遊びに來ないか。』

と、太郎が云えば二郎も一所に、

『ほんとにそうだ。そう爲たまえ！　君の様な奇麗なお友達が出來りやア、蝶々なんぞ捕えて遊ぶより、どんなに嬉しいか知れやしない。ねえ君、仲を好くしようねエ。』

と、兄弟して誘いましたが、蝶々丸わ頭を振つて、

『えゝ、有難う！　そう云つて下ださると、私も大變嬉れしいのですが、……私にわまだお國に、阿父樣も阿母樣もあります。……十年の間蝶々に成つて、宙を飛んで居る中も、懷かしいのわ阿父樣！　戀しいのわ阿母樣！　一日も忘れた事わありません。又阿父樣も阿母樣も、たつた一人の私ですもの、さぞ毎日思い出して、心配して居らつしやる事でしよう。……それで今この通り、元の人間に成りましたからわ、早く行つて阿父樣や阿母樣に、無事な顏が見せとう御座います。』

『ウン、そうだ、そりやア其筈だ。こうして僕達わ、始終阿父樣や阿母樣の側に居てさえ、晩に成りやア戀しくなつて、お膝え抱かれに行く位だもの……そりやア君の云う通りだ。ぢやアもう僕達わ止めないから、早くお國え歸りたまえ！』

『歸ります、歸ります、否、歸りとうございます。……けれども唯悲しい事にわ、先刻もお話した通り、私のお國わ雲の中で、羽根がなければ行かれない所……折角人間に復つても、人間にわ羽根が無し……あゝ何うしても歸れません。』

と、云うかと思うと又身を震わせて、正體もなく泣き倒れてしまいました。

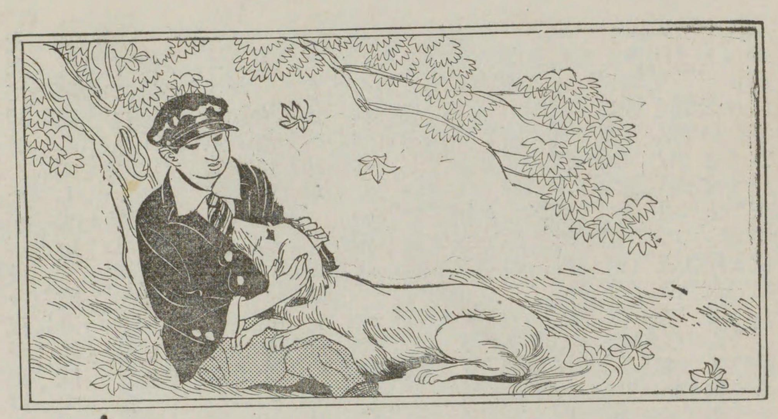
すると、天から降つたか、地から湧いたか、不意にその眼前え、一人の乞食阿爺が出ましたが、

蝶々丸の泣き伏して居る、頭の上え手をやつて、さも優しく撫てながら、

『可愛や〳〵蝶々丸！　その素直な心根と、親孝行の力にわ、邪見な親の角も折れよう、無慈悲な親も目が覺めよう、今日で十年の罰も濟んだ。案じるな案じるな、これから私が送つてやる。』

と、云うかと思うとその乞食わ、大きな一羽の蝶に成つて、蝶々丸を背に乘せ、さも輕々と宙を飛んで、雲の中えと登つて行きました。

これを見て居た兩人の兄弟わ、まるで夢を見て居る樣に、暫くわ茫然して居りましたが、初めて正氣に復つてからわ、今の蝶々丸の話に感じて、其後わ惡戲をせず、親にわ孝行、友人にわ親切。まことに好い兒になりました。



不思議の蘆笛

むかしある百姓の家に、太郎に次郎に三郎と云う、三人の息子がありましたが、三郎わ生れついて、大の馬鹿者でありましたから、阿父さんにも、阿母さんにも、又二人の兄さんにも、始終笑われて居りました。

また此近所に惡い猪が一匹居まして、その百姓の大切にして居る梨畑え、毎晩のように忍んで來てわ、一本宛根こぎにして持つて行きますので、百姓わ大きに驚き、それからわ毎晩この梨畑に、番人を一人宛付ける事にして、まづ初めわ總領息子の太郎に用心の鐵砲を持たせて、その梨畑の番をさせました。

處が太郎わ、宵の中こそ目を皿の樣にして、一所懸命に番

をして居ましたが、段々夜が更けるにつれて、眠くて〳〵たまらないものですから、とう〳〵グツスリ寝込んでしまい、曉方に成つて起きて見ましたら、もう何時の間にか猪が來て、梨を一本持つて行つてしまいました。

阿父さんわそれを見て、

『エイ　意氣地の無い奴だ。こんな事なら貴樣にわ頼まん。』

と、大層に叱りつけ、それから次の晩にわ、弟の次郎に云い付けました。

すると次郎わ、又鐵砲を持つて梨畑え出かけ、

『おのれ畑荒しの猪奴、今に來たら只一撃だぞ。』

と、恐ろしい意氣込で待ち構えて居ましたが、それも夜が更けるに連て、我慢がしきれなく成て來て、グウ〳〵居眠を初めましたから、其間に矢張大切の梨わ、猪に取られてしまいました。

其處で阿父の百姓わ、大きに腹を立てまして、

『何と云う役不立等だ。そんな奴に鐵砲を持たせても駄目だ。よし今日から乃公が番に行く。』

と、こう云つて騒ぎますと、馬鹿息子の三郎わ、その時ノツソリ進み出て、

『阿父さん〳〵！　そんなら私が今度行こう。』

と、云いますと、阿父さんも阿母さんも二人の兄さんも、みんな笑い出して、

『お前に番が出來る位なら、誰もそんなに心配しやしない。』

と、云つて止めましたが、

『いゝや、そうで無い〳〵。私が行つて退治してやる。』

と、眞顏に成つて力みますので、

『それぢやア試しに行つて見ろ！　こんな馬鹿な奴だから、猪に食われても惜しかア無い。』

と、とう〳〵三郎に鐵砲を渡して、梨畑え番人に遣りました。

すると三郎わ大喜びで、鐵砲を抱え込んで、梨畑の番に出かけました。猪を退治ようと云う一心ですから、馬鹿でも決して居眠をしませんでした。

其中に夜半になりますと、彼方の籔がガサ〳〵云い出して、やがて、大きな猪が一匹鼻を鳴なしながら、出て來ましたが、丁度三郎の前にある、一番大きな梨の木の下え來て、根をバリ〳〵掘り初めましたから、三郎わきつと目を注け、すつかり鐵砲の狙をつけて、ズドンと一發放しました。

するとその丸が、うまく咽喉笛に中りましたから、流石の大猪も、ウンと云たつ限り其場え倒れてしまいました。

『占めた〳〵！』

と、三郎わ大喜び、直ぐに猪の脚を縛つて、獨りで引ずつて歸ろうとしますと、丁度彼方から太郎が來ました。

太郎わ、三郎が何をして居るか？　屹度寢て居るに相違ないから、其處え行つて一番おどかして

やろうと、こう思ってやつて來たのです。

處が居眠をして居るどころか、見事に大猪を退治て居ますから、サア急に羨ましくなりました。自分達わ居眠をして、猪に梨を取られたのに、今この馬鹿三郎が、弟の癖に猪を取つて、こんな大手柄をしたとあつてわ、如何にも兄の顔が立たないと思うと、この三郎が又急に憎らしく成つて來ましたので、とう〳〵恐ろしい了簡を起し、いきなり鐵砲を取りあげて、三郎を其場で撃殺し、死骸わ側にあつた池の中え、そつと投り込んでしまい、それから猪を自分が引摺つて、阿父さんの處え歸つて來ました。

そして何と云うかと思えば、

『阿父さん〳〵！　今梨畑え行つたらば、三郎が猪に食われて居たから、直ぐ猪を撃ち殺して、弟の仇を取つて來ました。これ御覽なさい、この猪わ私が退治してやつたのです。』

と、大威張で云いましたので。阿父さんわ嘘とわ知らず、

『オ、それわ大手柄だ。よく猪を退治して來た、此奴さえ殺してしまえば、梨畑を荒されることも無し。それで私も安心だ。』

と、大喜びで褒美も澤山にやりまして、それからわこの太郎を、大層可愛がりました。

それに引かえて三郎わ、折角猪を退治たのに、その手柄を横奪された斗りか、科も無いのに自分まで殺され、池の底に沈められて、誰一人弔慰をしてくれる者もありません。

すると、やがて其池に芦が澤山生え茂りました。

元よりこの池にわ、前から芦が生えて居ましたが、今度新たに生えたのわ、如何にも奇麗な、如何にも大きな芦ですから、誰もみな不思議に思つて、わざ〳〵見物に來る位でした。で、梨畑の百姓も、其の評判を聞いて見に行きますと、成るほど見事な芦ですから、やがてこれを切つて笛を拵らえ、ためしに一吹き吹こうとしますと、こわ如何に！　笛わ自然に聲を出して、

『阿父樣〳〵！　ようこそ吹いて下だされた。私わ兄さんに殺されて、今わお池の底の屑！　撃つたわ私だが、今わお池の底の屑！』

と、こう云つて歌いますので、百姓わ吃驚し、

『ハテナ、妙なことを云う笛だ。ドレ、今度わお前吹いて見な！』

と、お内儀さんに渡しましたので、お内儀さんが吹こうとしますと、又前の樣に鳴り出して、

『阿母さま〳〵！　ようこそ吹いて下だされた。私わ兄さんに殺されて、今わお池の底の屑！　猪を撃つたわ私だが、今わお池の底の屑！』

と、云いましたので、いよ〳〵不思議がり、

『全體何の事でしよう？　事によつたら三郎の事かも知れませんから、試しに太郎に吹かせて見ましよう。』

と、云つて太郎を呼びましたが、何故か太郎わ首を振つて、どうしても吹こうとしませんから、

阿父さんわます〳〵疑いまして、逃げようとする太郎を捕え、無理に芦笛を吹かせました。

すると笛わ、一段聲を張りあげて、

『オ、恨めしや〳〵！　ようこそ吹いた、吹きおつた。私わお前に殺されて、今わお池の底の屑！猪を撃つたわ私だが、今わお池の底の屑！』

と、鳴り立てたからたまりません。太郎わ慌てゝ笛を投り出して、池の岸え兩手を突き、

『三郎や〳〵！　あゝ惡かつた、堪忍してくれ！』

と、云つても、何で追付きましよう！

『おのれ憎い太郎奴。よくも弟の三郎を殺して、乃公を今迄誑しおつたな。』

と、阿父の百姓わ腹立まぎれに、太郎を其儘池の中え投げ込んで、それから馬鹿の三郎の爲にわ、立派なお祭をしてやりました。

斯う成ると死んだ三郎も、恨が晴れたと見えまして、その後わその芦の笛も、もう何も云わなく成つて、吹く度によい音で鳴りました。

樂玉苦玉

上　玉屋の九郎兵衞

玉屋の九郎兵衞

むかし駿河の富士の山わ、ただの一夜でできあがつたという。それによく似た不思議わ、この『赤波』という村に、ある晩恐ろしいあらしが吹いて、大地も震うばかりに思つたが、その翌る朝になつて見ると、この西の方の村端れに、大きな山ができあがつたことだ。

山わ一晩でできあがつたのにも似ず、麓から頂上まで、木や艸がおい茂つている。鳥もいれば獸も住んでいる。それよりもなお不思議なのわ、その頂邊にわ一人の仙人がいて、その仙人をたづねていつた者わ、誰でも不老不死の法をさづ

かつて、どんな苦しい境界の者でも、たちまち安樂な身になるということだ。

が、その仙人にあつたという者わ、あいにく昔からまだなかつた。

ところが、ある時九郎兵衛という、氣の強い男がいて、これがこの山えおし登り、その仙人にあうつもりで、たつた一人で出かけていつたところが、途中で道をまよつて、どうしても山の上えわでられず、かえつてだん〳〵奥え〳〵と、深くはいつていく中に、いつの間にか日が暮れて、深い谷底えきてしまつた。

九郎兵衛、仕方がないから、その晩わそこで寢ようとおもつて、岩蔭に横になり、こけをふとんに、木の根を枕に、少しばかり寢たとおもうと、なんだかザワ〳〵物音がするから、ふと目を見開いてみたら、こわいかに！

つい見たこともない老人の、しかも高さが一尺ほどよりない、小さな人間が大勢よつて、眞中にかまどをきづき、その上に大きな釜をかけて、なにかグラ〳〵煮ていたが、やがて一人が、その釜の蓋をとると、一人が長いひしやくをいれて、しばらくかきまわしている中、『もうよかろう、』というと、その中で煮た物を、ひしやくの先でしやくツてわ、かまどの前においてある、大きな石の上に盛りあげた。

見ると、それわあめのようなもので、色が卵の白身に似ている。はじめわさも熱そうに、ボツポツと煙がたつていたが、それが少しさめてくると、今までだまつて見ていた、他の小人たちわよつ

てきて、手に〳〵そのあめのような物をとつて、ある者わ上えあげながら、ある者わまた地を轉がしながら、精出して團子のような物をつくりはじめた。しかもこんな歌をうたいながら、

『樂玉　苦玉！　この世の樂や　この世の　苦をば、
まるめて高く　手玉にとれば　ア、樂、樂や！
ころげてひく、　地上に練れば　ア、苦や、苦玉！』

妙な歌だとおもいながら、なおよくその團子を見ると、もとわ同じ白いあめなのが、手玉にとられて投げられたのわ、みな水晶のように光つているが、それにひきかえて、地上でころがされたものわ、みな鐵砲丸のように、たゞ眞黒なものになつてしまう。

九郎兵衛わ不思議でたまらないから、われ知らず首をのばして見ていると、小人どもわまた歌いだした。

『樂玉、苦玉！　この樂　見よや！　この苦を見よや！
まるめて黑く　ほそるわ苦玉！　ア、苦や、苦玉！
まるめて白く　ふとるわ樂よ！　ア、樂、樂や！』

九郎兵衛わ面白がつて、はてわノコ〳〵はいだして、

『すまないが、ちよいと見せてください！』

と、いゝながら、そこにできあがつた白玉と黑玉を、左右の手にとりあげたと思うと、小人たち

わさも驚いたように、ワアッと云つて逃げだしたが、その時もなお遠くえ行つて、こういうことを歌うのであつた。

『樂玉、苦玉！　苦も　樂玉や、樂　苦の玉や、
　まるめて　やがて、手にかさねば、ア、、樂、苦玉！
　まるめて　やがて、手をこぼれば、ア、、苦も、樂や！』

と、これわ幾度かくりかえして、そのまゝ姿を隠してしまつた。——後にわかまどもそのまゝ、出來上つた白、黒の玉わ、立派にそこにのこつている。

なに思つたか九郎兵衛わ、膝をうつてひとりうなずき、やがてその玉を、殘らずひろつて家えかえつたが、やがて村中にふれまわして、

苦樂山　苦樂仙人直傳
樂玉　苦玉　大賣捌所
苦樂堂九郎兵衛

という看板を、自分の家におしたてた。

『樂玉とわ樂の玉、苦玉とわ苦の玉、すなわちこれ神變不思議の仙法でござる。』

樂玉、苦玉？　ぜんたいなんの藥だろうと、ものずきの者が聞きにくると、九郎兵衛わ仔細らしく、

と、いう。——そんなら誰も樂玉ばかり買つて、苦玉を欲しがる者わあるまいといえば、九郎兵衛さらに膝をすゝませ、

『サ、そこでござるテ。なるほど樂玉わ樂にそういもちやにすると、しまいにわ苦の玉となる。また苦の玉も、その苦を忍んでもつていれば、はてわ樂玉と變るという。こゝらが仙法の祕密でござる。』

と、得意になつて辨じたてるので、誰もなるほどと感心して、醉狂に苦玉を買う者もあれば、慾ばつて樂玉ばかり仕込む者もあり、苦樂堂の店さきわ、大そう賑おうことになつた。

こゝにこの赤波村に、青二、黄太郎という、二人の少年があつた。二人わ大の仲好しだつたが、ある日學校の歸り途に、ふと苦樂山の話がでると、二人とも急に探險して見たくなつたが、それにわこの九郎兵衛の店えいつて、一つづゝ玉を買つて行こうぢやないかと、こういう相談がまとまつた。

が、その玉も、二人が二人とも同じ玉を買つてわ、かえつて面白くないから、それより一人が樂玉を買えば、一人が苦玉を買うと、こうべつ〳〵の玉を持つていつたら、そのきゝめがちがつてきて、自然愉快なことが多かろう。と、こう思つたものだから、そこで二人わ九郎兵衛の店えきて、

『樂玉を一つおくれ！』
『僕にわ苦玉を一つ！』

と、それ〴〵に玉を買い取つた。

すると、不思議にもその時に、白い小人と、黒い小人とが、店の屋根と、緣の下とにいて、白い

小人わ樂玉を買つた青二に、黒い小人わ苦玉をかつた黄太郎にと、べつ〳〵にてゝお辭儀をして、それから前を躍りながらいつたが、二人ともこれにわ少しも心づかず、やがて村端れの道を、苦樂山えと志した。

中汗の玉

樂玉をもつた青二わ、白い小人に案内されて、だん〳〵道を急いでいくと、やがて廣い草原えでた。見ると苦玉の黄太郎の方わ、いつの間にか途中でわかれて、こゝえ來たのわ青二一人だ。

て、青二わさつき買つた樂玉を、しきりに掌でまるめていると、手の心がムヅ〳〵してきて、體中が好い心持ちになり、足もかる〳〵と、まるで雲の上でもいくような氣がして、たゞなにかなしにうれしくてたまらない。

『どうもこれわじつに不思議だ。こうしてこの玉を持つてると、なんとも云われない好い氣持ちだ。やつぱり樂玉わ樂玉だけあつて、そのきゝめも恐ろしいものだなア。』

と、はてわたちどまつて樂玉を眺めながら、ひとり感心していると、この時さつきの白い小人わ、やはりその前に立つてゐたが、やがてむこうの小高いところに、大きな切り株があるのを見ると、すぐにそこえ駈けていつて、その上にはいあがり、そしてまたこちらを向いて、青二においで〳〵をした。

すると青二の足わ、自然と切り株の方をむいて、てやがその下まで來ると、小人わまた手をひろげて、ちうに三度ばかり圓いものをかいた。

とたんに青二わ、アアと大きなあくびを一つして、

『あんまり好い心持ちだとおもつたら、なんだか眠くなつたようだ。まだ苦樂山にわ間もあるから、こゝらで一休みして行かうか。』

と、いゝながらそこにかゞんで、切り株にもたれかゝつたと思うと、もうコクリ〳〵と居眠りをはじめた。そのとき手にもつていた玉わ、青二が舟を漕ぐはずみに、コロ〳〵と轉がつて、草の中え落ちてしまつた。

それを見ると小人わ、手をうつて笑つたが、青二わ正體なく眠つているから、少しもそれにわ氣がつかない。

笑つた小人わ、さも面白そうに躍つて、切り株の上を三度ばかりまわつたが、やがてその端に立ちどまつて、今度わ伸び上つて東の方にむかい、

『オウイ、オウイ、みんな來いやアい！』

と、大聲で呼びたてた。

青二わその聲にも氣がつかず、まだグウ〳〵寢ている。

すると、遙か彼方の森の中に、また可愛らしい聲がして、

『オウイ、オウイ！』

と、云つたかと思うと、さつきからの小人と同じような小人が、一人駈けだし、二人飛びだし、はてわ八人ばかりになつて、こちらえドン〳〵駈けてきた。

こちらの小人わそれを待つて、

『オヽ、みんな揃つたか。そろつたら、これを見ろ！　せつかく買つてきた樂玉を、居眠りの油斷の間に、これこのとうり手放した。その手放したがこつちのつけ目、さアみんなしてこの玉を、もんでやろう、もんでやろう。』

と、いうと、いま來た小人どもゝ一しよになつて、

『さ、それが好い、それが好い。』

と、いゝながら、小人どもわ、轉げ落ちた玉を眞中に、ずつと手をつないで輪をつくつたが、

『さア、始めた〳〵！』

と、一人が號令をかけると、みんなが揃つて歌いだす。

『樂の樂の樂玉や！
樂の裏わ苦の玉よ。もんで　苦玉にしてやろか。』

樂の玉も苦の玉よ！　みやれ　だん〳〵　重くなる。』

『重い　重い　重い玉！
玉も　重く　太つてわ、なんで　乘ろう　掌に。』

と、いゝながら、玉のまわりを躍りまわると、不思議にも中の玉わ、誰も手をそえないのに、ひとりでにまわりだしたが、その又グル〳〵まわる度に、なんかで息を吹きこむように、玉わだん〳〵と大きくなる。

すると、この時まで夢中に寢ていた青二わ、この小人どもの歌の聲や、玉のまわる音に目をさまして、ようやくこちらを振りむいて見て、はじめてギヨッと驚いたが、なにしろ小人どもの躍りまわるのが、いかにも面白そうなので、はてわ自分も浮かれだし、

『まて〳〵！　おれも一しよに躍つてやるぞ。』

と、同じように手足を動かして、玉のまわりをまわりはじめた。小人どもわそれをみると、たがいに顏をみあわせて、なにかうなずきあつていたが、きうにバタリと躍りをやめて、つないでいた手をはなすと、みなちうに舞いあがつた。

けれども青二わまだ浮かれて、玉のまわりをおどつているのに、その玉わ相變らずまわつて、はじめわ掌に乘せた玉が、いまわ肩にもかつがれないくらいな、大きな玉になつてしまつた。

やゝあつて青二わ、流石にくたびれたものだから、思わげヒヨロ〳〵と倒れたまゝ、もう起きあ

がることもできず。ホツと息をつきながら、あたりを見まわしたが、さつきわあり〳〵と見えていた、あの白い小人どもゝ、いまわ一人も見えなくなつて、たゞ自分の樂玉ばかりが、大きくなつて轉がつている。

『なんのことだ……まるで狐にでもつまゝれたようだ。だがこの玉わ馬鹿に大きくなつたものぢやないか。もうこれぢやア掌にわ乘らない。どうして持つていこうかしらん。——よいワ、掌でまるめるかわりに、こうして行つてもいゝだろう。』

と、まづ玉に兩手をかけて、ちようど雪轉がしでもおすように、ウン〳〵いつて押して行くのに、なるほどうまく轉がるが、そのまた玉の重いこと。

一つ轉がすたんびに、まるで地え根が生えたようで、容易に動かすことができない。と云つて、もとよりおいてわ行かれないから、青二わ一所けんめいの力を出して、エンサ〳〵と押していく苦しさ！　せつかくの樂玉も、いつか苦の玉になつて、額からわ汗の玉！

下宙の玉

青二わ樂玉を苦玉にして、汗をダク〳〵流しながら、苦樂山に登つていく間に、あの苦玉をもつた黃太郎わ、どこになにをしていたかというと、これわ青二にわかれてから、黑い小人に案內されて、いつの間にか來かゝつたのわ、石や岩のゴツゴツでている。恐ろしくわるい坂路であつた。

見ると黑い小人わ、その惡い坂路を、身輕にピヨン〳〵とんでいくが、これにひきかえて黃太郎わ、わら草履一枚で石の上を行くのだから、痛くて〳〵たまらない。

が、足元に氣をつけていると、手元がついおるすになつて、かんじんの苦玉をまるめる事ができない。そうかといつて一心に苦玉をまるめていると、すぐ岩角えつまさきをぶつけて、親指の爪をはがすという騷ぎ。黃太郎わ涙ぐんで、

『アヽ、こりやアほんとに苦玉に違いない、この玉をもつてから、行けばゆくほど苦しいことばかり。……ほんとに惡い物をかつたもんだ。』

と、幾度か後悔したが、

『イヤ〳〵、こゝが辛抱のいるところだぞ。こないだも、玉屋のぢいさんが、樂玉苦玉の講釋をしたときに、樂玉わあんまりおもちやにすると、しまいにわ苦玉になつてしまうし、……また苦玉も苦にしないで、よく大切に持つていりやア、樂玉にする事ができるといつた。だから青二さんと相談して、二人が別々に買つて見たのも、つまりそれが眞か僞か、試してみるためなんだから、なんぼ苦玉が苦しいからといつて、今更捨てることわできやしない。』

と、また思いかえしてわ、苦しい坂路を我慢して、ウン〳〵、云いながら登つて行く。

すると、幸にもその路わ、やがて少し平なところえきたから、ヤレうれしやと思つていると、こ

わいかに！　今度わ手にもつている苦玉が、にわかに重くなりはじめた、はじめわ手が疲れてきたから、それで重く感じるのだと思つたが、その重さがだん〳〵増して、しまいにわ片つぽの掌でわ、とても載せきれないくらいになつた。

が、もとより仙人の直傳というからにわ、このくらいな不思議わありそうな物だと、黃太郎わ別に驚きもしないが、何しろ重くてたまらないから、右にもちかえ、左に持ちかえ、スウ〳〵いつて登つていくと、今度わ額からでる汗が、その苦玉の上に落ち、苦玉わその汗で手をすべると、ハツと思う間に下におち、そのはずみで又コロ〳〵と、傍の谷底え落ちこんでしまつた。

黃太郎わあつけにとられて、しばらく谷を見おろしていたが、玉わ岩角にも木の根にもとまらずどん〳〵底の方え轉がつていつて、はるか谷間の草の中で、ようやく止まつた様子だから、まづ安心とわ思つたが、さてあの深い谷底え、これからおりて行かなければ、その玉を拾うことができないかと思うと、またウンザリしてしまつた。

それも、この谷を下りるばかりなら、どうにもして下りていこうが、あの重い玉を拾つてから、またこの急ながけをあがるのわ、とてもできない話だから、黃太郎わとう〳〵思いきつて、そこから引きかえそうとまで思つた。

で、しぶ〳〵元の路をこようとすると、今まで苦しさとせつなさとで、つい氣に留めなかつた黒い小人が、鼻の先に現われて、谷の方を見おろしながら、しきりに手足を動かしている。

それをみると黃太郎わ、急にまた氣をとりなおした。

『そうだ。僕わあの苦玉を、自分が好んで買つたのぢやないか。それを今谷底え落として、そのまゝうつちやつていつてわ、第一自分の氣にすまないばかりか、後で靑二さんに聞かれても、ほんとに恥かしい話だから、このがけがどんなに急でも、あの玉がどんなに重くても、これわすてゝわいかれない。ヨシ、行つて拾つてやるぞ。』

と、思うともう猶豫わしない。黃太郎わ支度をして、まづがけを下りにかゝつた。

ところが、たゞさえ坂路の急なので、ひどく足を痛めているところえ、またがけを下りるのだから、その苦しさわ一トとうりでない。岩にぶつけてわ膝頭をすりむき、石にあてゝわ、足の指をくじき、幾度となく落ちそうになつて、その度に膽を冷やしたが、それでもなお勇を鼓して、はるか谷底の苦玉をあてに、このがけを下りていつた。

で、やつとのことで底までくると、また一つ驚かなければならない事がある。それわほかでもない。今までわよし重くとも、自分の掌に乘るほどであつた玉が、この谷え轉げこむ間に、大層ふやけてしまつて、今でわ直徑二尺もあろうと云う、大きな玉になつてしまつた。

黃太郎わ顏をしかめて、

『これわどうしたことだろう。あんな小さな玉だつた時でも、重くなつてとても持てなかつたのに、こんなに大きくなられちやア、いよ〳〵僕の手に負えないが、ほんとに何うしたらよかろうなア。』

と、途方に暮れて、ぼんやりそこに立ちすくんでしまつた。そのとき又氣がつくと、いつの間にかさつきの小人が、その大きくなつた玉の上に、ちよいと飛びのつて躍つている。そのまた躍る樣子が、あの玉乘りの曲藝に似ているから、黃太郎わふと思いついた。

『ア、しよせん持つてわ行けないんだから、僕も乘つて躍つてやれ！』

と、今わかえつて大膽になつて、その小人のおりた隙を見て、いきなりその玉の上に乘つてみた。すると不思議でわないか！　その大きくなつた苦玉わ、黃太郎を上に乘せると、急にグラ〳〵動きだしたが、アレアレと云う中に、もうちう〳〵に浮きはじめた。

黃太郎わ驚いて、あたりを見まわすと、こわいかに！　さつきから汗を流して、足を痛めてやつとのことで下りたがけわ、もう目の下に見えるくらいに、玉わ高く宙を飛んでいる。

『ヤアこれわ不思議々々々！』と、また前を見渡せば、黑い小人も同じように、宙を飛んでいくのであるが、これわ玉にもなにものらず、樂々と空をとんでいく。それにつれて自分の苦玉も、フワリ〳〵と飛んでいく。——黃太郎わまるで夢をみているようだ。

この夢の間に、いつ來るともなくあるところへ來て、バタリと玉が止まつたから、黃太郎わ眼のさめたような心地で、四邊をよく見まわすと、こゝわいかにも景色の好い、高い山のてつぺんで、しかもその眞中にわ、苦樂山と刻りこんだ、石の杭がたつている。

『ヤレうれしや！　さてわもう苦樂山えきたのか。それにしてもさつきとちがつて、玉に乘つていたその樂さ！　大るほどこれわ、あの苦玉が、見事樂玉になつたのだナ。それにつけても靑二さんわ、ほんとの樂玉を持つていながら、まだこゝえ來ていないのわ、全體どうしたことだろう？』

と、思いながら、立ちあがつて、麓の方を見おろすと、ちようどこの時麓の方から、大きな玉を轉がしながら、急な坂路をエイ〳〵いつて、登つてくる者がある。——しかもそれわ樂玉の靑二だ。

黃太郎わ見て氣の毒がり、急いで自分も坂路をおりて、一しよになつて玉に手をかけ、ウンウンと押してやると、玉わ急にかるくなつて、いまわなんの造作もなく、苦樂山の頂邊え來た。

とたんに白黑の二つの玉わ、ひとりでに二つに割れて、あの白黑の二人の小人わ、どこえか消えてしまつたのである。

鷗岩

上　怪しいこだま

學校わもう暑中休暇になつた。そこで太郎わ、家中の者と一しよに、暑い都の家をあとに、涼しい田舎の別莊えと、しばらく轉地することになつたのである。

この別莊というのわ、海にそうた、小高い山の半腹にある、茂つた森のなかゝら、ひろ〳〵とした海を見渡すところわ、實になんともいわれない景色だ。

もつともこの邸わ、もとわ立派な華族のものであつたのだが、長い間空いていたあげく、ついに太郎の親の手にうつゝたのわ、實に今年になつてからのことだから、したがつて太

郎をはじめ、家中の者の、こゝに暑を避けるのわ、まつたく今年がはじめてであつた。

だから太郎わ樂みにして、明日わいよ〳〵別荘え行くという、その前の晩などわ、ろく〳〵眠られないぐらいだつたが、さてその次の日に、初めてこゝえ來て見ると、家の中の居心も、庭の外の景色も、みんな思つたより好いので、實にこんなうれしいことわなかつた。

で、二三日わ夢中で暮らしたが、その中に、ふと妙なことが聞こえた。

それわ太郎の家の女中が、近所え用達しに行つたとき、誰かに聞いて來たのであるが、——それわ、

『この別荘にわ、なにか怪しいことがある。——すなわち化物屋敷である。だから長く空いていたのだ。』

と、こういうことであつた。

『ナニ化物屋敷?』

これを聞いた家中のものわ、ひとしく目を圓くしたが、さて、この二三日の間に、なんの不思議もなかつたのを見ると、それわ根もないことであろうと、たちまちの中にうち消されてしまつた。

するとその翌日のことだ。日の中わ風もなく、たゞじり〳〵と照りつけるばかりで、暑さに外え も出られなかつたが、夕方からわ少し涼しくなつたので、太郎わ座敷からハンモックを持ちだし、どこかえかけて涼もうとしたが、庭にわあいにく思わしいところがない。

來るとわなしに裏山の方えきて、森の中えわけいると、こゝにわなりの面白い松が、幾本となく

たち列んでいて、ハンモックなぞを掛けるにわ、じつにおあつらえむきにできている。

『ア、こんな好いところがあるのに、今までまるで知らなかつた。ドレ、こゝで涼んでやろう。海わよく見えるし、風わよく通るし、こんな好いところわありやしない。』

と、ひとりごとをいゝながら、松と松との幹から幹え、例のハンモックをしつかり掛けて、その上にユラリと乘り、『ア、好い心地だ。』と、しばらく景色を眺めていたが、その中に思いだして、さつきから懐中にいれていた、世界お伽噺を一册出して、ハンモックにゆられながら讀みはじめた。

で、はじめわ無言で讀んでいたが、だん〳〵面白くなるにつれて、だまつてわいられなくなつて來たから、はてわ聲に調子をつけて、高らかに讀みだすと、こわいかに！

誰か近所に隱れていて、太郎の讀み聲のまねをする。

不思議と思つて、こちらでやめれば、先方でもまたやめてしまう。

またこちらが讀みだすと、むこうでも同じように讀みだす。

『變だぞ！』

と、太郎が身をおこしかければ、また先方でも、

『變だぞ！』

と、いうがたゞしその姿わ見えない。

太郎わ右を見、左を見、前をすかし、後をふりむき、上をもとめ、下をさがしたが、どこにも誰もいる様子わなく、そのくせ、試しにせきばらい一つ、こちらで、

『エヘン！』

と、高くいえば、どこかでエヘン！　と高くいつたが、右とも、左とも前とも後とも、さて上とも下ともわからぬ。

『馬鹿ツ！』

と、また試してみるのに、むこうでもおなじく、『馬鹿！』と叫ぶ。

『お父さん！』

『お父さん』

『お母さん！』

『お母さん！』

幾度ためしても同じようだ。

太郎わこの時、たちまち女中の聞いてきたことを思いだし、さてわ化物？　と、思うと一時わゾウツとして、肩から水をあびたように思つたが、もとより氣の勝つた生まれつき。あわてゝハンモックから轉げおちるようなことわせず、やおら身を起してしずかに下え降り、なお一度聲高く、

『誰だ？　何者だ？』

と、云つてその怪しいこだまの、『誰だ？　何者だ？』と、答えるとき、じツと耳をすまして聞くとこの聲わ正しく森の奥の、山の陰の方から來るようだ。

『ウン、彼方だナ？』

と、うなづくと、あとわもう無言で、ツカ〳〵と森の奥の方え進んだ。

來てまだ日の淺いこの別荘。家や庭にこそなれたれ、こんな森の奥まで來るのわ、じつに今までなかつたことだ。されば道も不案内であるが、なんの、行つて行かれぬことわあるまい。と、膝も越す夏草を、ガサリ〳〵と掻きわけて、山の根近く踏みこんでいくと、道わたちまち極まつて、むこうわ山の絶壁になつてしまつた。

が、その絶壁の根元に、石碑のような物がたつている。

おりから日わ暮れかけて、たゞさえ森の奥、山の陰の、闇さわ一そう闇いから、その石碑のようなものに、全體どう云う文字があるか、それ等わとても見ることができない。

けれども太郎わ、この時好奇心わ頂上にたつして、なんでもこの石碑こそ、不思議の原、變化の主、きつと見屆けてやらねばならぬと、なおその側え進もうとしたが、前にわ茨がよこたわつて、さながら鹿柴をしかれたごとく、また鬼づたがはびこつて、まるで鐵條網という有様。——素手で わ容易にちかづけない。

太郎わしばらく考えたが、

怪しいこだま

『イヤ、よいワ。こゝまで見届けておけば、あとわ明日來てもわかる。』

と、ようやく思いあきらめ、ふたゝび元の道を引返えそうとすると、これわしたり！　さつきわたしかに來られた道が、もうどうしてもわからない。行つても行つても、おなじ所ばかり……。

中　怪しい笛の音

太郎わぼんやりと立ちすくんでしまつた。日わもうとつぷり暮れてしまつて、あたりわたゞもう眞の暗、鼻をつまゝれてもわからないくらい。

『ア、困つたなア。』

太郎わわれ知らずぐゝちをこぼすと、またそのとうり、例の聲わおうむ返しに、

『ア、！　困つたなア！』と云う。

『や、また眞似をしやがる。』

と、今度わ口のうちでいつて、的もなくキツとにらんだが、

『まてよ……こりやア何うしてもうわさのとうり、この森にやア魔がいるに違いない。魔という奴わ、夜になるといよ〳〵元氣がよくなる奴だから、よし、今夜わいつそこゝに泊つて、魔物と元氣競べをしてやろう。』

と、子供でこそあれ大膽な太郎わ、この夜をこゝで野宿することにきめた。

それにわ幸いのハンモツク、これを釣つて寢ようとしたが、どつこい、今わもう暗くなつていてどこにこれを釣つてよいか、その勝手が一こう知れない。

『まゝよ、たつた一晩のことだ。』

と、やがて手さぐりで草の上をさがし、なるたけ地の濕つていない、岩や石のないところを選つて、そこえゴロリと横になつたが、なにしろさつきから森中あるいて、ずいぶん疲れているところだから、横になるともうたわいもなく、グウ〳〵という高いびき。——どこまで度胸の好い事であろう。

すると、やがて眞夜半ごろ、誰とも知れず耳の側で、

『太郎さん、起きたまえ！　太郎さん、おきたまえ！』と呼ぶ。

はじめわ夢のようにきいていたが、あまり呼ばれるのでとう〳〵正氣づき、

『エツ？　何だ？』

と、いゝながら眼をあけてみると、あたりわ相變らず眞暗だが、その中に、まるで幻燈でも寫すようにあり〳〵と見えるのわ、可愛らしい白髪の小人だ。

『ヤ、お前か、私を呼んだのわ？　ぜんたい何者だ？』

と、聞くと、小人のぢいさんわニコ〳〵笑いながら、

『あなたをお迎いにまいりました。』

『僕をお迎いに？……そりやアまたどこからだ？　誰のところからだ？』
『誰でもございません。この森の主からでございます。』
『この森の主だと？　この森わ、僕のお父さんの別荘の中にあるんだから、主といやアやつぱり僕のお父さんのはづだ。』
『そりやア理屈わそうでございますが、ほんとうわこの森にわ、主があるのでございまして、別荘の持主わ變りましても、森の主わだい〳〵變らないのでございます。』
『おかしな事をいうなア。それぢやア全體その主わなんだ？』
『千年たつたおうむでございます。』
『ナニおうむ？　道理でさつきから眞似がうまいと思つた。面白い〳〵！　だが、その千年もたつたというおうむわ、ぜんたいどこに住んでるのだ？』
『ヘイ、それわたゞいま御案内いたします。さア、どうぞお出でくださいまし！』
と、小人のぢいさんわもう先に立つ。
太郎わその後について行くのに、不思議にも今度わ、さつきとちがつて道わよくわかつて、そのぢいさんの歩いて行くほどのところわ、木も草も、石も岩も、あり〳〵と目に見えるのである。で、さほど遠く來たとも思わないのに、もう例の絕壁の下えきた。見ると、その側の石碑の面のさつきわ少しも見えなかつた文字が、今わ明かに見えるでわないか。それわ、

『おうむ岩』
と、こう刻りつけてあるのであつた。
『ハヽア、さてわこの大岩が、おうむ岩というのだナ、して見ると、その千年のおうむと云うのわこの近所に住んでるに違いない。』
と、太郎わ四邊をキヨロ〳〵見まわした。すると、ぢいさんわ、
『モシ〳〵、なにを見ているんです。はやくこちらえいらつしやい！』
と、云うからそちらをむくと、こわいかに、今まできりたつたような絕壁のところわ、いつの間にかパツと左右に開いて、中わトンネルのようになつている。
『こゝからはいるのか？』
『ヘイさようでございます。』
と、ぢいさんわまた先に立つて、ズン〳〵奥の方えいくから、太郎もまたその後から行くと、洞わだん〳〵明るくなつて、はてわ目もまぶしいばかり、上も下も、右も、左も、まるで水晶で張りつめたような、いかにも立派な御殿えでた。太郎わわれを忘れて、
『ア、立派だなア！』
と、云うと、その聲が四方八方に響いて、
『ア、立派だなア！』

と、云う聲わおよそ七八へんもくりかえされた。
半分わ夢心地の太郎わ、更に正面をキツと見ると、そこにスックとたつているのわ、頭に銀の冠をいたゞき、身に雪の様な毛衣をまとつた、一人の男であつたが、その眼の圓くて愛らしいところや、鼻の曲つてしかもこわくない工合が、どうやらおうむの顔に似ているから、太郎わ臆面もなく、
『千年のおうむとわお前のことか？』
と、聞くと、先方わちよつとうなづいて、
『オヽ……この森の主のおうむだ。』
『それぢやアさつきから眞似をしたのわ、みんなお前のしわざだな。』
『オヽそうとも、みな私がした事だ、太郎さん驚いたネ？』
『なアに、驚くものか……、面白かつた……。』
『オヽ……實にお前わ度胸の好い子だ。その氣性がたのもしいから、わざ〳〵迎いにやつたのだが……どうだ、しばらくこゝで遊んで行かんか！』
『ウン……面白けりやア遊んで行こう。』
『それわ云うまでもないことだ。おれわこゝに住んでいるが、この森の中での出來事なら、みなこの耳にきこえてくるから、どんな眞似でもして見せる。』
『それわ面白そうだ。でわ、しばらく遊んで行こう。』

と、云う時また思いだして、さつきのぢいさんわとふり向くと、これわいつの間にか見えなくなつてしまつた。
『オヤ、ぢいさんわどこえ行つたろう？』
と、云うと、おうむわ笑いながら、
『イヤ案じることわない。あいつわこの森の木の精だから、どんな事があつても、この森をでる氣づかいわないんだ。——今また見えなくなつたのわ、誰か森え來たものがあるんだろう。』
と、いううちに、どことなく幽かに笛の音がきこえてきた。すると、おうむわたちあがつて、すぐその笛の音のまねをする。笛の音がやめば、おうむもだまる。
又鳴りだせば、聲をたてゝ、笛の音と、おうむの聲とわ、ちようど山のこだまのように、幾度となく繰りかえされる。太郎わやがて我をわすれて、
『やア、こりやア面白い〳〵！』
と、手をうつて浮かれだした。

下　木の精わ氣の所爲

おもいがけない笛の音と、これに合わすおうむの聲の面白さに、思わず浮かれだした太郎わ、どうかしてその聲のするところえ行つて、その笛を吹く主を見たいとおもつたが、さてそ

れわこゝでわできない。なにしろ自分わ洞の中に、まるでとりこという仕末だから。

が、それにつけても、さつきからしばらく姿の見えない、あの木の精のぢいさんわどうしたろう？

と、太郎わまたそれを氣にしてゐると、おうむわ一向それにわかまわず、なおしきりに笛の音の眞似をしている。

その中に、その笛の音が、いよ〳〵近く、ますます〳〵面白くなつてくると、やがて小さな足音をたてゝ、洞の中えはいつてくる者がある。

何者だろうと見てゐると、それわ誰あろうさつきのぢいさん、木の精だと云う小人であつたが、まるで酒に醉つているように、手をふり、足をそらせて、夢中になつて踊つてくる。

するとまたおうむも、この小人の踊りに浮かされ、自分も壇の上から踊りだし、はてわ小人と手を取り合つて、ピイ〳〵　トツピキピ！

ヒユウラヒユウラ、ヒウユ！

と、口笛を吹きながらはねまわつた。

これを見ると太郎も、なんでだまつていられよう。

『こりやアいよ〳〵面白くなつたぞ。まて〳〵、おれも一しよに踊るから。』

と、自分も一しよに踊ろうとすると、さてこれわどうしたこと？　足わいつの間にか下にすいついた様になつて、いくら力んでもあがらばこそ。たゞ手ばかり振つて踊ろうとすれば、たちまちヨロ〳〵とたおれてしまう。

それに引きかえておうむと木の精わ、浮かれゝば浮かれるほど、一そう身輕に飛んだり、跳ねたり、はてわ獨り身をもがいて、下手な起き上り小法師のように、意氣地なくたおれて居る太郎の上を、踏んだり、蹴つたりするから、太郎わもうこたえられず、大聲をだして、

『ア痛い、痛い！　オイひどいことするぢやないか。』

と、云つても先方わ耳にもかけない。

ピイヨ　ピイヨ　ヒユラヒユラヒユウ！

トツピキ　ピのピの　トツピキピのピイ！

と、夢中になつて踊りながら、なおも太郎を足にかけたが、その中にひどく横つ腹を蹴られて、

『アッ！』

と、高くさけぶと、途端に笛の音わパッタリやんだ。

止むとすぐ太郎の側え來て、

『御免なさい、〳〵！　どこか怪我しましたか？』と云う。今までさん〴〵ふみつけにしておきながら、いま急にあやまつたつて、痛いのがすぐなおるものでもないと、太郎わまだ腹をたてながら、その者をにらみつけると、こわいかに！　それわおうむでも、木の精でもなく、ついに見かけない男の子。——しかもその手にわ笛をもつている。

『君わなんだイ?』

と、不審をたゞせば、むこうでも不思議そうに、

『あなたこそ何だつて、こんなところに寢てるんです?』

『こんな所?』

と、云われてまた見まわすと、あの立派な御殿わ、いつの間にか消えてしまつて、こゝわ宵に臥轉んでいた、森のなかの草の上、それもいつの間にか夜があけて、海にわキラ〳〵と旭がのぼりかけ、浪の金色に光つているのが、木立の間から透けてみえる。

『おうむわどこえいつたろう? さてあの木の精わ?』

太郎わぼんやり考えこんで、しばらくわ言葉もだし得ない。

その中にその子わ、太郎の顏をじつと見ながら、

『オツ、あなたわこの別莊の坊ちやんぢやありませんか。』

と、いわれて太郎も、その子の顏をよく見ると、どうやら濱で見た事のあるような。——そうだ。これわいつも海水浴のとき、衣服をあずける茶店の子の、たしか次作という子に違いない。

『お前わ、あの……濱の次作ぢやないか。』

『そうです。……坊ちやん! 全體なんだつて、こんなところに臥てらしつたんです? 私わほう〳〵探してましたぜ。』

『ウン……、なにも臥る氣ぢやなかつたけども……森ン中で日が暮れて、出られなくなつちやつたもんだから……』

『ハヽヽ、それぢやきつと坊ちやんも、鸚鵡岩にだまされたんですネ。さもなけりやア、なんぼ日が暮れて闇いツたつて、迷い兒になるような森ぢやないんです。』

『……それぢやアお前も、あの鸚鵡岩知つてるのかイ?』

『知つてるどころぢやありません。ほんとに面白い岩ですから、私やアときゞ〳〵こうやつて、笛を吹いてくるんですが、吹くところによつちやア、よく鸚鵡が眞似しますから、ほんとに面白くツてたまらないんです。ところで、實わ昨夜夜が更けてから、あなたンところの女中さんがきて、坊ちやんが夕方からお見えにならない、もしやお前知らないかツて、しきりに探して居らつしやいましたから、私もよくわ知りませんが、事によつたらあなたが、まだ土地になれてらつしやらないので、この鸚鵡にだまされて、そのまゝかえる事ができないんだろうと、こう思つたもんですから、わざと笛を吹いて鸚鵡をおこして、このまゝではいつてきたんです。——しかし私も、あんまり夢中に笛を吹いて、ついあなたの臥てらつしやるのを知らず、泥足でふンづけまして、まことにすまない事いたしました。』

と、はじめてわけを聞いてみると、太郎わどうやら夢のさめたようだが、それにしても不思議なのわ、あの鸚鵡に木の精、あれわ全體どうしたろう! と、また次作にむかつて、

『だがねエ、次作！　お前よく知つてるというが、全體あのおうむわなんだろう？』

と、さつきからの話を一とうりすると、次作わ笑いながら、

『坊ちやんも學校えいらつしやるくせに、あの譯がわからないんですかねエ。――こういうと生意氣ですが、私だつて敎わつたんです。あの大きな岩があるでしよう。あれが妙な形をしているので、ちようど山のこだまのように、こつちが聲を立てるとうり、みんな響いて聞こえますが、それがまるでおうむの眞似をするようなので、それでおうむ岩と云うんです。で、昔わ學問が開けないもんですから、なんでも岩の中に魔物が居るの、ヤレ、おうむの主が住んでいるのと、不思議そうに云いましたが、今その道理が解つてしまうと、まア井戸をのぞいて物をいうようなもんで、どんな眞似をされたつて、少しも不思議わないんです。』

と、なにも知りそうもない濱の子供から、物理學の講義を聞かされて、太郎わ今更きまりがわるく、そつと頭をかきながら、

『そうか、それでおうむの方わ解つたが、あの木の精わぜんたいなんだろう？』

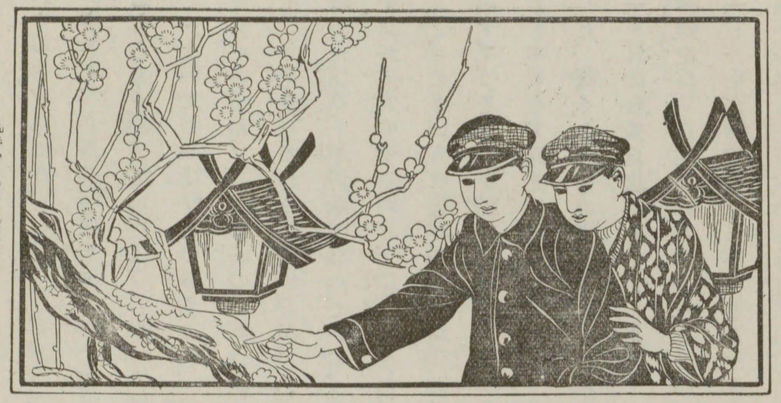
と、云うと、次作わまた大きに笑つて、

『それこそほんとに、坊ちやんの『氣の所爲』でしよう。』

と、一言にしやれ飛ばされて、あとわもうグウの音もなかつた。

天の白駒

上　『時』とわどんな物？



『時』とわどんな物

流れる川も、寒い時にわ凍りつき、暑い時にわ干ることもある。『時』わ、寒いとて暑いとて、たゞのまたゝく間も休まばこそ、ずん〳〵走つてゆくその速さ！　これにわどんなに馬を飛ばせても、けつして追いつく話しでわない。

が、その足の速い『時』それわ全體どんなもので、どうして走つてゆくのであるか、それが一度見たいものだと、不思議な考えをおこしたのわ、つねから奇態な問いをだして、いつも學校の先生やら、また家のお父さんをいじめる、駒一と

いう少年であつた。

すると、また近所にものしりのぢいさんがいて、駒一が『時』を見たがつているのをきゝ、もつともらしく教えていうに、

一たいこの『時』というものわ、目で見たり手で捕んだりできるものぢやない。がその代りその時の走るにわ、こゝに一つのわけがある。——あの高い空の上！　あすこにわ日と月と、星と雲、下界で見えるのわこの四つだが、あの雲の上に、恐ろしく大きな白馬が一匹、しかも腋から羽根のはえた奴が、年が年中飛んでいて、その飛んでいる勢いで、日や月が出たりはいつたりし、その日や月が出入りするので、『時』がだん〳〵たつという、こんな仕掛けになつているのだ。

と、こういうことだから、駒一わ膝をすゝませ、

『ヤア、そりやア面白いナ。ぢやアその天の白馬が、つまり『時』の元なんですネ。で、その馬わどうすりやア見えるんです？』

と、聞くと、ぢいさんも乗り地になつて、

『それにわまた法があるテ、全體この白馬わ、めつぽう足の遅者な奴だが、でも年に一度づゝわ、蹄鐵を打ちかえなけりやアならない。その時がこつちのつけ目だ。

『どうして蹄鐵を打ちかえるんです？』

『なんでも三百六十五日目にわ、これが新規の蹄鐵を取りに、わざ〳〵天から舞いさがつて、地獄の鍛冶屋え飛びこむんだ。だからなんでも大晦日の晩の、夜の十二時を合圖に、家中の燈火を消して、北の方の戸を五寸ほどあけ、そこから空をのぞいていると、その白馬が天から下だつて、地獄えゆくところが見えるのだ。——オゝ、ちようど今日わ大晦日！　なんと今夜奮發して、一つそいつを見る氣わないか。』

と、委しく由來を教えられた上に、元氣までつけられたから、たゞさえ好奇心のみちた駒一わ、すぐにそのとうりの手筈をして、その晩の十二時頃から、戸のすき間から北の空をみていた。

すると、十二時の時計を合圖にピカリと、空で光る物があるから、思わずまたゝきして見なおすと、もうその光り物わ見えず、空わもとの闇になつて、星ばかりキラついている。

さてわ今のがそれであつたかと、ぢいさんのところえ行つて聞いてみたら、

『いかにもそれに違いない。天から地獄え行くのでさえ、たゞピカリと光る間だから、それをもつて考えてみても、あの白馬の足の速さ、すなわち時の速さがわかるだろう。』

と、云われた。

が、駒一わ殘念でならない。なんでも見屆けてやろうと思つたのに、たゞピカリと光つたばかりで、少しも形を見る事のできなかつたのわ、いかにもわれながら意氣地がないので、しばらくわ腕を組んで考えたが、ふとまた妙なことを考えた。

まてよ！　今あの白馬わ、地獄え蹄鐵を打ちかえにいつた、あの白馬のことだから、打つたらま

た飛び出して、すぐに天え昇つてしまうだろうが、それでもその地獄にわ、白馬の足痕があるだろう。いやその古い方の蹄鐵も、たしかに残つているはずだ。よし、天え昇る事わできないでも、地獄えわゆかれないことわない。白馬の姿わ見そこなつても、足痕の見届けられないことわない。そうだ一ばん出かけてやろう。

と、こう思いたつと矢も楯もない、駒一わすぐ支度して、これから地獄行きということになつた。

かねてこの近所にわ、一つの大きな噴火山がある。駒一わ朝に晩に、その頂上から火の出るのを見て、あれこそ地獄の火であろう、と、こう思つていたくらいだから、いよ〳〵地獄行きをするにわ、まづもつてこの噴火山に登り、それからどこかの入口を見つけて、一ト思いに飛びこむが一ばんと、大膽にも家を出たのである。

たゞしそのいでたちわと見れば、身にわ火伏せの帽子に、火除けの外套を着こみ、足にわ革の足袋をはいて、そして丈夫な竹馬にまたがつた。竹馬とわ考えたもので、あの焼け石だらけの山わ、これでなければ登れぬと、常から人にも話していたそうだ。

さて駒一わ、この竹馬にのつて、火山の頂上えと志したが、元より高さ三尺という竹馬、一またぎに一間あまりわ伸すから、高い火山も半時ほどの間にわ、もう頂上まできたのである。

見おろせば火山の口わ、黒くまき上げる煙の間から、眞赤な火焔を幾筋となくふいて、これに顔を向けただけでも、眉わこげ、鼻わたゞれ、目も燒けつぶれてしまいそうである。

が、駒一わ、火除けの帽子、外套のきゝめで、さらに身に傷つくことなく、朱をにる鍋でものぞくような氣で、しばらく中を見こんでいたが、その間も地の底からわ、ゴト〳〵〳〵という物音が、耳も聾ゆるばかりにきこえてくる。

まてよ！　あのゴト〳〵いうのわなんだ？　事によつたらまだ白馬がいるので、その足音がするのかも知れないぞ。ウン、そんならぐづ〳〵してわいられん。

と、いう中にもう竹馬を下り、それを小腋に抱えたと見る間に、そのまつ赤な火焔の中え、ヒラリとばかり飛びこんだ。

飛んで火にいる夏の虫！　それわたちまち身を亡ぼす。しかるにこの駒一わ、火伏せ火除けのまじないのある、稀代の帽子、外套の力で、すこしも熱さを身におぼえず、かえつて綿の中をゆく心地で、しばらくわ足のとめどもなかつたが、その間およそ三十分ばかり、ほうにふれてくる風の、さすがに熱さを感じるころ、ふと物に當つて、立ちどまると、こゝわ地獄の底と見えて、前にわ恐ろしい大釜をすえ、これに湯をたぎらせて、周圍にわ赤鬼が五六匹ばかり、火をたいていた。

『ヤ、なんだこの野郎わ？』と、一匹の鬼が鐵棒を取りなおして、キツと身構えをして見たが、見れば可愛らしい駒一の姿に、ちとはりあいがぬけたとみえて、

『こりやア見なれない人間の小僧だが、全體なにしにこんなところえ來た？』

と、尋ねた。駒一わ平氣なもので、一トとうりそこらを見まわしたのち、

『天の白馬わもう歸つたか？』

と、聞くと、ほかの鬼がまた出てきて、

『ナニ白馬わ天の物、いつまでこゝにいるものか、來るとすぐ歸つて行つた。』

と、いう。駒一わ合點せず、

『でわあのゴト〳〵いうのわ何だ？　ありやア白馬の足音だろう。隱さずに云つてしまえ！』

と、嚴しく談じかけると、なんと思つたか鬼どもわ、何かしきりにさゝやきはじめた。

中　地球のまわる音

鬼どもわなにかさゝやき初めた。全體なにをいつているのだろうと、駒一わしばらくだまつて見ていたが、やがてその側えツカ〳〵と寄つて、いきなり一匹のえりくびをつかみ、

『ヤイ鬼！　はやくたしかな返事をせんか！』

と、いうと、その鬼わ首をちゞめながら、

『イヤこの小童め……がらにもあわぬ力だぞ。』

と、その手に自分の手をかけて、押しのけようとするところを、今度わまたグツとねじあげ、

『サ、有體にいえばよし。いわなけりやア貴樣らを、片端から捕虜にして、珠數つなぎで娑婆えつれてゆき、見世物小屋にさらしてやるぞ。』

と、云うので鬼も肝をつぶし、

『イヤ申します〳〵！　なんでも殘らず申します。』

と、云えば、他の鬼も一しよになつて、

『ほんとにあなたのような強い方わ、地獄はじまつてこのかた、いらつしつたことがございません。もう決して手むかいわいたさず、なんでもお尋ねになることわ、きつとお答え申しますから、どうぞご勘辨下ださいまし！』

と、心から恐れいつたようにいう。そこで駒一も鬼をはなして、傍の岩にドツカと坐をしめ、

『サ、そんなら、さつきから尋ねている、天の白馬のありかをいえ！』

『ソ、それわ只今も申しあげましたとうり、もう天え歸つてしまいましたので……。』

『そんならあの響わなんだ！』

『ア、あの音でございますか、あれわその……この地球のまわる音でございます。』

『ナニ、地球の廻る音だ？　……ウン、なるほどこの地球というものわ、年が年中まわつているものだが、まだその音わ聞いたことがない。』

『それわそのはずでございます。こゝわ地獄なればこそ、よくその音がきこえますが、上にばかりいらしつてわ、とても聞かれるものでわありません。』

『だが、その音わどこでするのだ！　イヤ、それよりも、全體この地球が、どういうふうにまわる

のだか、それがぜひ見たいものだナ。』

『それわ譯わございません。こゝわ地球の心ですから、すなわち心棒がございますので、その心棒のまわるのが地球のまわるのでございます。』

『でわさつきから聞こえるのわ、その心棒のまわる音か？　イヤ面白い〳〵！　でわその心棒のまわるところを、おれによく見せてくれ！』

と、はや立ちかゝるので、鬼どもわまた先にたつて、駒一を心棒えと案内したが、その間も何かさゝやいてわ、しきりにうなずきあうのである。

間もなく來たのわ、これぞ地球の眞中の、しかも盛んに火の燃えているところ。その火焔の恐しさわ、金をもとろかすばかりである。

けれども駒一わ、身に不思議の着込みを着けているので、こたつにあたるほども感じない。したがつて眉もこがさず、またゝきもせずにみている。それがまた鬼どもにわ、實に意外でたまらぬので、これがたゞの人間なら、とうに黒こげになつているはずだに、さりとわ奇體な小童よと、たゞ舌をまきながら、又してもさゝやきあう。

駒一わまた、じつと火焔の中を見ていると、なるほどその眞中に、大きな火の車があつて、その車の眞中に、火柱のような心棒が、根も知れず先も見えず、ただしきりにまわつているが、その響の恐ろしさわ、電神を千匹ほど一隊にして、揃つて太鼓をうたしても、こうわ鳴るまいと思うほどだ。

『ア、愉快々々〳〵！　僕わ初めてこんなところを見た。なるほどさつきから聞こえるのわ、この心棒の音に違いない。』

と、ひとり感心してゐると、鬼わまた側えきて、

『なんと、これでお氣がすみましたか。』

『いかにもすんだ。だがまだすまんところがある。全體この地獄えきたのわ白馬の正體を見るためだ。それに足痕も見つけないでわ、どうもこのまゝ歸られんなア。』

『そんならせめて足痕だけ、ご覽にいれるといたしましよう。』

『オ、あるならぜひみせてくれ。』

『さア、こゝえお出でください！』

と、いうのでまた案内されて、針の山を登つていくと、やがて山のはざまのところに、この地獄にわ珍らしい、清水の吹きでている井戸え來た。

が、見ればその井戸の側に、なるほど大きな蹄のあとが、七つ八つあり〳〵と、砂の上に殘つている。

聞けばこの清水こそわ、かの天の白馬の、來たときと歸るときに、必ず飲んでいく水とやら。

下　お年玉の春駒

これこそ白馬の天にのぼつた證據と、鬼どものさして話すのを聞くと、駒一わがつかりしたがまた氣を取りなおし、

『まてよ……なるほど白馬わ逃がしたが、こゝに水があるのを見たら、また好いことを考えた。』

という。鬼わ聞きとがめて、

『よいことわ、どんな事をお考えですか！』

『ほかの事でもない。——全體あの白馬わ、地軸の火の車がまわるので、それに連れて空を驅けるのぢやないか。』

『それわそうでございます。』

『だから！　あの火の車さえ止めてしまえば、白馬わ空を驅けなくなる。——白馬さえ驅けなければ、ソレ、時も進まない道理だ。』

『なるほど……火の車が止まつてくれゝば、自然私どもの仕事も樂になるから、こんなありがたいことわないが……』

『しかしこれわできない相談……どうして火の車が止りましよう！』

『ところが止める法があるンだ。』

『エツ、火の車がとめられますか？』

『そりやアなにより耳よりだ。』

と、鬼どもわ、われ知らずすりよると、駒一わ井戸を指しながら、

『これを見ろ、この水だ！　見ればこの井戸わ、天の白馬が飲むだけあつて、水が十分に噴いている。今この井戸の水を、ポンプでもつて山から引き、あの地軸だという、車の火にかけるなら、いかに火が燃えていても、たちまちチユウといつて消えてしまう。火さえ消えれば車がとまる。車が止まれば馬もとまる。そこでお前たちの仕事もとまつて、體わ樂になるというもンだ。——どうだ好い工夫ぢやないか！』

云うとさア鬼どもわ、手をうつてうれしがり、

『そういうことなら、善わ急げだ。すぐにポンプを持つてきましよう。』

と、勇みたつて針の山をおり、

『さア青もこい、赤も來い！　黒もきて手つだつた！』

と、仲間の鬼をかりあつめ、それから奥の藏えいつて、用意のポンプをひつぱり出した。

全體この地獄の藏に、どうしてポンプがあるかというと、これわ全體火を消すためでわなく、かえつて地の上の人間が、飲み水の井戸を掘るとき、下からこのポンプでもつて、水を吹きださせるのに使うポンプだ。

で、鬼どもわこのポンプを引き出すと、一列になつて肩に擔ぎながら、急いで山え登つて來た。
まつ先にわ駒一がたつて、すなわち消防司令官をつとめる。
『氣をつけイ！　ポンプを井戸につけたら、さア水をくみ出せ〳〵！』
と、勵ます。鬼どもわ命令どうり、ヤッシ〳〵と力をあわせて、ポンプの機械を動かすと、見るみるうちに井戸の水わ、この長い管をつたわつて、さながら白龍の昇天するごとく、勢い鋭くふきだすのである。
『ウン、面白い〳〵！　この勢いならわけわないぞ。』
と、駒一わまた號令をして、筒の先を地の軸までひかせ、あの恐ろしい響とゝもに、盛んにまわつている火の車を目がけ、サッとばかりに振りかけさせた。
が、もとより地球をまわすほどの大車、その車をまわす程の猛火わ、なか〳〵急にわ消えそうもない。
『もツとやれ、もツとやれ！　しつかり！　しつかり！』
と、手を振つて號令する。
鬼どもゝ一生けんめい、角の先から汗を流して、しきりに水を振りかけたが、その中に、水の量が增してくるとその力も強くなつて、さながら夕立の降るように、火焰の上え浴びせかゝり、浴びせる度にシユウと云つて消える火わ、たちまち白い煙となつて、もう〳〵とたち昇る。その煙の間から、ヒラ〳〵と燃えあがる炎わ、まるでさゝいごの枝のよう。
『ソレ、もう少しだ、しつかりやれ！』
と、駒一も聲をからして鬼どもを勵ます。
鬼どもゝ今わ退くにもひかれず、
『アヽ、火を消すというものわ、火を燃やすより骨の折れるものだ。』
と、中にわぐちをこぼす者もあつたが、何しろ火の方わ、更に誰も燃え草をいれず、それに反して水の方わ、かの井戸のつづくかぎり、ドン〳〵後から浴びせるから、流石の火焰も今わはや、赤い舌さえ吐くことできず、車のまわりも覺束なくなつて、はてわあれ程の地軸の火も、シユウとばかり高鳴りをして、ついに全く消えてしまつた。
すると、その消えたはずみに、例の白煙わ一團になつて、旋風に綿の巻きこまれたように、そこからわきあがつたが、見ると……その一團の煙わ、たちまち一匹の白馬になつて、たてがみを振り尾を舞わして、高く天え登ろうとする。
これを見ると駒一わ、なんで猶豫するものか。
『さてわ天の白馬わ、まだそこに隱れていたのか。よしおれが捕まえてやるぞ。』
と、勢いよく飛びあがつて、いきなりたてがみを取るが早いか、ヒラリとばかりまたがつた。
と、思うとこわいかに！　これわ天の白馬でもなく、やはり白煙であつたから、なんで鞍坪に止

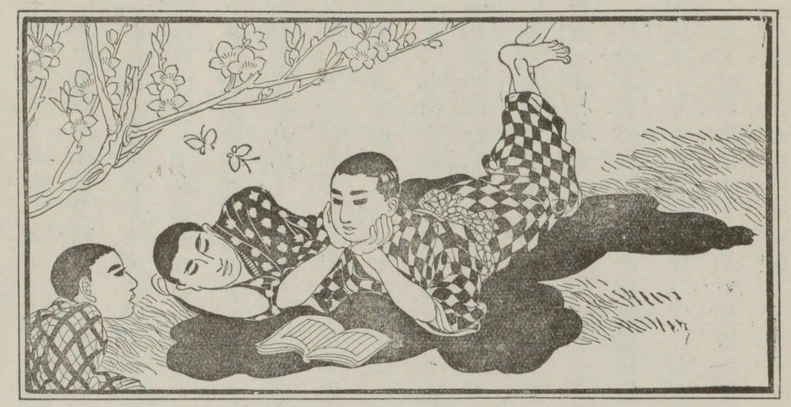
まりえよう。たちまちのうちに振りおとされて、その深さ何千丈ともしれぬ、地軸の底え眞逆様！

アツと思わず聲をたてると、その聲に驚いて、かけつけて來た母親が、蒲團の上から搖りおこし、

『なにをうなされてるんだねエ。』

と、いわれてはじめて目が覺めたら、今までのわみな夢！

枕元にわ白駒でわなくて、お年玉の春駒があつた。



鶴の袋

むかしある所に、夫婦の者がありました。亭主わ至つて好人物でありましたが、女房わ性來氣荒者で、時々わ腹立ちまぎれに、箒木を薙刀の代りにして、亭主に打つてかゝると云う恐ろしい劍幕でありました。

或日の事でありましたが、亭主わまた女房に、酷い目に會わされて、只一人表え逃げ出し、森の方えとやつて來ました。

すると、彼方の木の陰で、何だか鳥の鳴き聲が聞えますから、その聲を的に行つて見ますと、其所に仕掛けてある係蹄に、一羽の大きな鶴が落ちて、バタ〳〵騒いで居る處です。

『旦那々々！　助けて下ださい！　そうすれば屹度お禮をし

ますから……』

と、云いますと、男わ考えましたが

『いかにも助けてやり度いが、お前を又家え連れて行くと、家の女房が亂暴者だから、またどんな酷い目に會わすか知れないよ。』

と、云いますと、鶴わまた云いますにわ、

『そんならお前さんの家え行かずに、私の家え連れてつて下ださい！　屹度いゝお禮を仕ますから。』

『そう云う事なら助けてやろう。』

と、やがて係蹄を外づしてやりましたら、鶴わ嬉しそうに羽叩きして、

『それでわ斯う入らしつて下ださい！』

と、先に立つて案内しますから、その後をついて行きますと、間も無く鶴の住所だと云う、立派な家えやつて來ました。

見るとその座敷の壁に、奇麗な袋が掛つて居ましたが、鶴わその袋を取りおろして、

『出ろ〳〵！　二人！』

と、聲をかけますと、不思議やその中から、可愛い小僧二人が飛び出して、

『ハイ、何の御用で御座ります？』

『お客樣に御飯をあげな！』

と、云いますと、小僧わ直ぐにまた袋え飛び込みましたが、見る〳〵中に袋の中から、結構な御馳走を、山の樣に擔ぎ出して、男の前に列べました。

男わ大喜びで、まづ御馳走を食べて見ますのに、今までついに覺も無い位な、甘い御馳走でありますから、あぶなく頰が落ちそうに成りました。

御馳走が濟みますと、鶴わ男に向いまして、

『それでわこの袋を、先刻のお禮に差上げましよう。』

と、云つて渡してくれましたから、男わ嬉しがりまして、やがてこの袋を持つて、家の方えと歸つて來ました。

處がその途中に、自分の叔母さんがありましたから、まづ其所え寄つて、

『叔母さん〳〵！　今日わ好い物を手に入れたから、一つお前さんに御馳走してあげましよう。』

と、例の袋を持ちだして、

『出ろ〳〵！　二人！』

と、云いますと、忽ち二人の小僧が出ました。

『叔母さんに御馳走してあげな！』

と、云いますと、見る〳〵中に二人の小僧が、御馳走を山の樣に持ち出しましたから、叔母さん

わ大喜びで、直ぐに之を食べました。

所でこの叔母さんわ、心の善く無い女でありましたから、こう云う重寶な袋を見ると、さア欲しくてたまりません。其所で工夫を考えまして、急いで風呂を立て、

『お前さぞ艸臥れたろうから、一ト風呂入つて行つてわ如何だ?』

と、云いますと、

『そいつわ有難い。でわ一ト風呂貰つて行こう。』

と、男わ何の氣無しに風呂に入りました。

その間に叔母さんわ、大急ぎで巾と糸を出し、甥の持つて來た袋と、少しも異わない様な袋をこしらえ、そつと兩方すり替えて、眞實の不思議な袋の方を、自分が盗んでおきました。

所え男わ風呂から出ましたが、こう云う事わ夢にも知りませんから、

『あゝ好い心地に成つた。それでわ直ぐにお暇をしよう。』

と、この僞物の袋を擔いで、やがて家え歸つて來ました、

家でわ女房が、門口で待つて居ましたが、亭主を見るともう聲を荒らげて、

『またこの人わ、何所を今まで遊んで居んだねエ!』

と、叱りつけますと、亭主わニコ〳〵しながら、

『まアさ、そう腹を立てなさんな。今日こそわお前の機嫌の直る様に、私わ好いお土産を持つて來たぜ。こう見なさい! この袋わ不思議な袋で、出ろ〳〵二人! と云つて呼ぶと、この中から小僧が二人飛び出して、御馳走を持つて來い! と云うと、其奴が山海の珍味と云う珍味を、見る間に擔ぎ出すと云う、何と重寶な袋だろうがな。』

と、云いますと、女房も面白がつて、

『まア、そんなら早くその御馳走を、私にも食べさせて下ださいな!』

『よし! 今出してやるぞ!』

と、云いながら袋に向つて、

『出ろ〳〵、二人!』

と、呼んだが、まだ誰も出て來ません。これわまたその筈で、もと〳〵叔母さんがすり替えて置いた、僞物の袋ですもの、いくら呼んでも小僧二人わ愚、鼠一匹も出て來わしません。

『出ろ〳〵、二人!』

と、呼び立てたが、何の返事もありません。これわまたその筈で、もと〳〵叔母さんがすり替えて置いた、僞物の袋ですもの、いくら呼んでも小僧二人わ愚、鼠一匹も出て來わしません。

すると女房わ、怒るまい事か! 腹を立てまい事か!

『エ、まア此人わ、よくも私をだまかしたね。』

と、云う中にもう箒木を振り立てゝ、ポカ〳〵と打つて掛りましたから、亭主わ頭をかゝえながら、

『これわたまらん〳〵！』

と、また表え逃げ出してしまいました。

逃げてまた森え來ますと、嬉しや先刻の大鶴が、今度わ長い脚をコンパスの様に廣げて、ノソリノソリやつて來ましたから、男わまづその側え行つて、今の話を訴えますと、鶴わ笑いながら、

『ハヽヽ、それわお氣の毒でしたねエ。そんならもう一つあげますから、これを持つて今度も亦、途中で叔母さんの所え行つて、またお風呂に入つて、それから家えお歸りなさい！』

と、親切に今一つ前のと少しも變りの無い、奇麗な袋を出してくれました。

男わ喜んでそれを貰い、鶴に教わりました通り、途中の叔母さんの所え來まして、わざと袋を眼の前に置き、今度わ御馳走を出さない中に、頼んで風呂に入れてもらいました。

その後で叔母さんわ、この袋を見ると、先刻の事を思い出し、今度わ一つ自分でやつて、また御馳走を食べてやろうと、廢せばよいのに先刻の眞似をして、

『出ろ〳〵、二人！』

と、云いますと、袋がムク〳〵と動きまして、中から二人飛び出しました。所がその二人が、可愛らしい小僧でわ無くて、恐ろしい顏をした大男が、而もその手に六尺棒を持つて、

『おのれ！　この慾張婆奴！』

と、云うよりはやく左右から　叔母さんを袋叩きにしましたから、叔母さんわ肝を潰し、

『アレ、助けてくれ、助けてくれ、人殺し〳〵！』

と、一所懸命に呼びますと、その聲を聞きつけて、男わ風呂から出て來ましたが、この體を見るとわざと驚いた風をして、

『ヤア、これわ大變だ。そんな物の出ろ筈わ無いが……』

と、云いますと、叔母さんわまだ打たれながら、

『は、はやくこの二人を袋の中え、追い込んでおくれよ！』

と、頼みます。

『それわ追い込んでやらない事も無いが、何しろこんな酷い目に會うにわ、何かお前さんが悪い事をしたのだろう。さアそれをまづ白狀しなさい！』

と、云いますと、叔母さんも我を折つて、

『そ、それならもう仕方が無いわ、私わほんとに悪い事をした。先刻お前の寄つた時、あの袋をすり替えたんだよ。』

と、すつかり白狀しまして、

『その眞物の袋を返えすから、何卒私を助けておくれよ！』

『そんなら助けてあげましょう。』

と、云いながら二人の大男に向つて、

『もうよい、入れ！』

と、聲を掛けますと、二人わ忽ち體を飜えして、そのまゝ袋え入ってしまいましたから、叔母さんわ初めて命を拾つて、ホッと息をつぎながら、やがて奥にしまつて置いた、眞物の袋を出して、甥に返えしてしまいました。

さてこの男わ、こゝで眞物の袋を取りかえしてしまいましたが、この二度目の袋の方も、矢張り一所に持ちまして、このまゝ家え歸つて來ました。

そこでまづ女房を呼び、

『今度こそ眞の御馳走をするよ。』

と、眞物の袋に向つて、

『出ろ〳〵、二人！』

と、呼びますと、今度わ無事に二人の小僧が、女房の前に飛んで出まして、いろ〳〵御馳走を列べました。

これにわ流石の女房も、大層機嫌が好くなりまして、嬉しがつてこの御馳走を食べました。

それを見すまして亭主わ、そつと眞物の袋を隱し、わざと二度目の袋の方を、女房の側に置いたまゝ、自分わ奥の方え入つてしまいました。

その後で女房わ、また御馳走が食べ度くなつたものですから、この二度目の袋に向い、

『出ろ〳〵、二人！』

と、呼びました。

するとまたその中から、六尺棒を持つて大男が、二人そろつて飛び出して、いきなり女房に打つてかゝりましたから、女房わ膽をつぶし、

『アレ……人殺し！　人殺し！　助けて、助けてエ……』

と、云いますと、その聲を聞きつけて、亭主わ奥から出て來ました。

『何うしたのだ？』

『今の袋からこんな人が來て、私を打つていけないよ……はやく二人を追い込んでおくれ！』

と、頼みますと、亭主わ笑いながら、

『どうだ、痛いかネ！』

『痛いどころぢやアありやしない。……も、もう息が切れてしまうよ。』

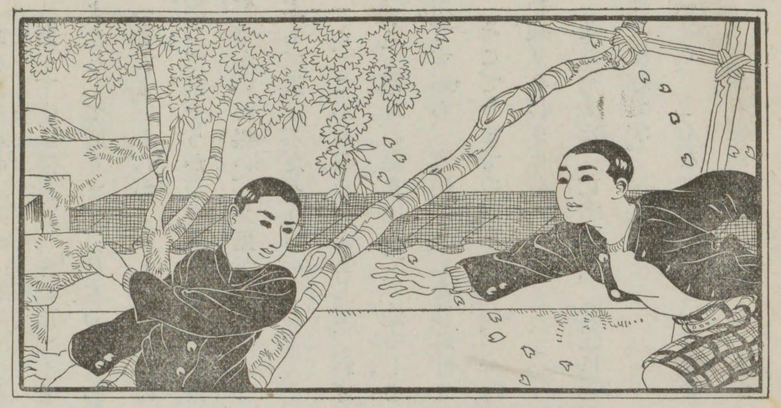
『どうだ、つらいか？』

『つらいどころぢやありやアしない。……も、もう、私わ死んでしまうよ。』

『それぢやア私が助けてやるが、その代り此の後わもう私を打ちなさんなよ。……打たれると痛いと云う事や、撲られるとつらいと云う事わ、もうそれで解つたろう。』

『だからもうこれからわ、決してお前さんを打たないから、何卒私を助けて下ださい！』

『よし、それでわ助けてやる。』
と、また二人に向いまして、
『もうよい入れ！』
と、云いましたら、忽ち袋え飛び込んでしまいました。
これで女房わホッと息をつき、初めて命を拾いましたが、その後わ之に懲りて、決して亭主を打つ事わせず、まるで生れ變つた様な、やさしい女に成りました。



地獄滿員

戰爭で人が澤山死んだ時の事です。

そしてその死んだ人が大方地獄え落ちるので、地獄行の電車わ、いつも滿員札をさげて居ます。

『チンチン、動きまアす。』

と、車掌が云つても、中の人わ動けない位に、ぎつしり詰まつて居るのですから、流石に戰場でわ強かつた勇士も、此所でわ苦しい〳〵と、泣聲を出す仕末です。

それに引かえて、極樂行の電車を見ると、いつも中わガランドウで、滅多に乘人がありません。たま〳〵窓から見えるのわ、カアキイ色のや、赤筋のあるのに、黑に金モウルのついた帽子で、みんな日本の軍人許です。

ある日日本の軍人が、戰場で名譽の戰死をして、この電車の停留場え來ました。

所が丁度極樂行わ、先刻出てしまつた所で、後にわ地獄行の電車が、獨逸兵を大勢乘せて、今出ようとして居ります。日本の軍人わ考えました。

『まてよ。おれわこうして極樂行のバスを貰つて來たが、丁度地獄行の出る所だから、一寸見物に廻つて來やうか。なアに別に惡い事した覺わないから、たとい地獄え行つたつて、鬼に責められる氣づかいわ無い。又鬼が出て來たつて、おれわ日本の軍人だぞ、桃太郎の子孫だと云やア、膽をつぶして逃げるだろう。』

と、こんな事を考えまして、わざとその電車に乘り込んでしまいました。

と、電車わ動き出して、途中しよう塚と云う所に停まり、それから三途に來ますと、それからわ川ですから、汽船で渡らなければなりません。

そこで今までの電車の客わ、一時に汽船に移りましたが、その船がまた小さいので、なか〳〵皆わ乘りきれません。

それをまた、亡者共わ、我先にと押しわけきわけ、船に乘ろうとするものですから、棧橋も大變な混雜です。

『コレ、そんなに押しちやいけません、順に〳〵！』

と、船の者が制めて見ても、なか〳〵亡者わ聞きわけないので、ひどく困つて居りますから、日本の軍人わ氣の毒がつて、

『よし、それぢやア手傳つてやろう。』

と、劍をぬいて揮り立てながら、

『コレ、皆靜にせんか！　云う事聞かんと打ち切るぞ。』

と、云いますと、それを見て獨逸兵の亡者わ、皆目を圓くして、

『ヤ、こゝまで日本兵が追つて來たな。ソレ逃げろ〳〵！』

と、云うので、中にわあわてゝ川え飛込むもあれば、素ばやく船え逃げ込むもあつて、又一しきり混雜しました。

その中に船わ動き出しましたが、その時わもう日本の軍人も、船の中に乘つて居たのです。

すると船員の赤鬼が切符を改めに來て、

『貴君わ一體何處え行くのです？』

と、云いますから、

『僕わ極樂に行くんだ。』

『エ、極樂え？　それぢやア道がちがいます。これに乘ると地獄え行つちまいますよ。』

『そりやア承知だ。承知で地獄え見物に行くんだ。』

『そりやア困ります。常なら兎に角、此頃わこの通り込み合うんですから、そう云う御見物わ御斷

り致します。』

『そんな事云つたつて、もう乘つた者わ仕樣が無いぢやないか。』

『いゝえ、いけません。お歸り下ださい！』

と、云うので、日本の軍人わ憤つた風をして、

『生意氣云うな！』

と、云う彈みに、一寸肩をついたのでしたが、元より力があるものですから、鬼わよろ〳〵とよろけて、舷を踏みはづし、ドブンと川え落込んでしまいました。

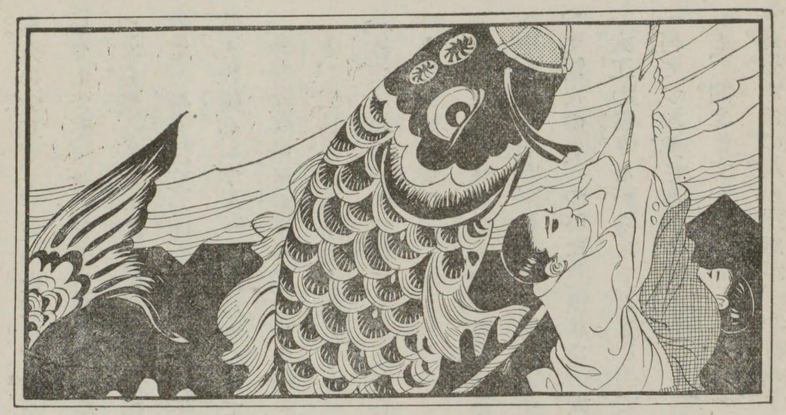
それを見ると日本の軍人わ、又可哀そうになりまして、つづいて自分も川え飛込み、その鬼を助けようとしました。

所がいくら泳いでまわつても、その鬼わ捕まりません。そして後をふりむくと、もう船わ行き過ぎてしまいました。

仕方が無いから、陸に泳ぎついて、ホッと一息つきながら、全體何所だつたろうと見まわしましたら、彼方に立派な御殿が見えて、芳い香の風が吹くと、面白い音樂の聲も聞えます。

アヽやつぱり極樂がよいなと、日本の軍人わポッケトから極樂行のパスを出して、急いで極樂えと向いました。

極樂行のパスと云うのわ、旭日の章の旗だつたのです。



羊橋

むかし、ある所に一人の大工が居りました。仕事わなかく〳〵上手でしたが、何分家内が大勢なので、いくら稼いでも追付きません。家わ段々貧乏するばかりです。

けれどもこの男わ、至つて正直な、そして慈悲深い質でしたから、家に羊を一匹飼つて、それを自分の子供も同樣に、可愛がつて居りました。

ある時の事で、長雨の後が大水に成つて、町の大切な橋が落ちまして、その橋を三日の間に、元の通り架け直す樣にと云う、むづかしい注文が、その大工に降り掛つて來ました。それと云うのも、數ある大工仲間の中で、仕事わ此男が一番巧いと云う評判が常から聞えて居たからです。所が、いくら

名人の大工でも、とても出來ない相談ですから、大きに弱つてしまいましたが、その代り此仕事を見事仕揚げれば、また褒美も澤山貰えるのですから、何うかしてやつて見度と、種々考えて見ましたが、さて好い智惠も出て來ません。

で、折角注文わ聞きながら、矢張り斷らなければ成らないか知らんと、大工わ夜の更けるまで思案した揚句、『アヽ』と溜息をついて、其儘床に就こうとしますと、誰だか戸外で呼ぶ者があります。

『オイ〳〵一寸此所を開けな！』

と、云いながらトン〳〵〳〵と、頻りに戸を叩きますから、

『誰だイ今頃やつて來て……用なら明日の朝來てくれ！』

と、云いますと、

『イヤ、なんでも今夜の中に話があるんだ。はやく開けろ〳〵！』

と。云う聲が、如何にも用がありそうですから、急いで戸を開けて見ましたら、其所にヌツと立つて居たのわ、ついに見慣れない大きな男で、而も鬼の樣な恐ろしい顏容をして居ります。

大工わ驚きながらも、氣丈な男ですから、

『何ですお前さんわ？』

と、聞きますと、

『乃公わあの川の主だが、お前が今度頼まれて、橋を架けると云う事だから、一つ手傳に來てやつたんだ』

『そうですか、それわわざ〳〵有難う御座いました。ですがあの大きな橋を、たつた三日で架けるなんて、そんな無理な注文が、人間業に出來るもんですか。だからもう思い切つて、明日わ斷ろうと思つてるんです。』

『イヤ、人間にわ出來まいが、乃公が手傳えば出來るだろう。』

『成る程……お前さんわ川の主で居らつしやる。……それぢやア出來るかも知れませんな。』

『だから手傳つてやろうと云うんだ。心配せずに引請けて、明日わ早速仕事にかゝれ！』

『それぢやアそう致しましよう。』

『乃公わ先え行つて待つてるぞ。』

と、川の主と云う大男わ、約束をして行つてしまいました。

思い掛無い手傳が出來て、大工わ急に元氣付き、これわ運が向いて來たと、嬉しさにろく〳〵眠りもせず、やがて次の朝になつて、支度をして川え來て見ますと、川の主わ約束を違えず、ちやんと其所に待つて居ります。

そこで二人わ、直ぐ仕事にかゝりましたが、流石に川の主の手傳だけあつて、仕事わ面白いほど捗取り、その日の暮れる時分にわ、もう三分通り出來上つて居ります。

こう云う風で次の日も、また川の主のお庇で、もう七分通り橋の形が出來、さて約束の三日目に

わ、とう〳〵十分に仕揚げてしまいました。

大工わもう嬉しくつてたまらず、改めて川の主に向い、

『さてどうも此度わ、お庇様で大切な仕事を仕揚げまして、こんな有難い事わ御座いません。付てわ御褒美を受取り次第、早速御禮を差上げ度う存じますが、何か御好みが御座いますなら、それを承つておき度う存じます。』

と、云いますと、川の主わニヤリと笑つて、

『イヤ、別に金や寶の禮わ入らん。其代り、此橋の出來上つた所で、初めて此所を渡る者を、供物として乃公が貰うから、其つもりで居るがよい。』

と、云うかと思うとその姿わ、何所えか消えてなくなりました。

するとその翌日の事です。いよ〳〵橋が出來上つたと云うので、大評判になりましたが、何しろ急拵えの橋だから、丈夫に出來て居ないかも知れない、それにわ誰彼と云おうより、これを拵えた大工をば、試しに渡らせて見るがよいと、斯云う事になりました。

なんぼ渡り試しだと云つても、初めてこれを渡る者わ、直ぐ川の主の御供物に成つて、命を取られると云う事ですから、これにわ大工も弱りました。

けれども正直な男ですから、今更後えわ退きません。遂に覺悟を極めて、橋を渡る事に成つたのです。

見ると橋の兩方にわ、見物人が大勢出て、橋の出來上りを褒めながら、大工の渡るのを待てつ居ります。

此時大工わ、もうこれが此世の見納めと、心の中で念佛を唱えながら、已に片足を踏み出して、橋を渡り掛けようとしますと、何時の間に出て來ましたか、家に飼つて居た羊が、チヨコ〳〵と駈けて來て、大工の前を渡つて行きましたが、丁度橋の中央まで來ますと、何かに吸いつけられる樣に、クル〳〵と廻りながら、川え落ちてしまいました。

その代り大工の方わ、何の怪我も過失も無く、安々と橋を渡りましたから、兩方の見物人わ、一度に手を拍つて囃し立て、つづいて先を爭いながら、彼方からも此方からも、橋を渡つて見ましたが、少しも危險氣がありませんので、流石わ名人の仕事だと、誰一人感心しない者わ無く、やがてこの大工にわ、澤山の褒美が出て、大層面目を施しました。

それと云うのも、全く平生可愛がつて居た。あの羊が身代に立つて、川の主の御供物に成つたからだと云うので、大工わ羊の忠義を嬉しがり、永く人に知らせる樣にと、町の者に頼みまして、この新しく出來た橋を、羊橋と云う名にしました。

日、月、風

むかし〳〵、或る所に年寄つた百姓が居りまして、其所に三人の娘がありました。

三人共至つて美しいので、兩親わ大の自慢でありましたが、これ程の容貌の娘わ、滅多な所え嫁に遣れぬと云つて、大層大切にして居りました。

ある日の事で、この百姓爺さんわ、畠え出て働いて居りましたが、その日わ丁度冬の事で、而も空わ曇つて居ましたから、いかにも寒くてたまりません。

爺さんわまたしても手に息を吐きかけながら、

『あゝ、寒い〳〵！　寒くてたまらんワ。こう云う時にお太陽樣が、一寸でも顏を出して、私の體を溫めて下だすつたら、

お禮にわ何でもあげる。イヤ、私の大切にして居る惣領娘でも、直ぐにお嫁様にさし上げるがなア。』

と、空を仰いで云いました。

すると、雲の陰でお太陽様わ、この事をお聞きに成つて、ニツコリ笑いながら、そつと雲をかきわけて、下をじつとお照らしなさいましたから、爺さんわ急に溫く成りまして、ホク〳〵喜んで居りました。

其所え丁度惣領娘が、家から阿父さんの襟巻を持つて來まして、

『さぞ阿父さん寒かつたでしよう。これをはやくお着なさい！』

と、云いますと、爺さんわ頭を振つて、

『イヤ、よく氣が付いてくれたが、もうそんな物わ入らなく成つたよ。そして今お太陽様に、お前をさし上げるお約束をしたから、はやく雲の上え昇るがいゝ。』

と、云う中にもう空からわ、お迎いの雲が舞い下つて來ました。

その儘連れて行つてしまいました。

さて爺さんわ、仕事をしまつて家え歸りますと、家でわ婆さんが不思議に思つて、

『惣領娘わ何うしました？』

と、聞きますから、

『イヤ、嫁にやつたよ。』

『何處え？』

『而もお太陽様の所え上げたんだ。なんと大した婿殿だろう。』

と、云いますと、

『それわまア、何よりお目出度い事だつたねエ。』

と、婆さんも大層喜んで居りました。

その後二三日經ちますと、今度わその爺さんが、森え木を伐りに行きました。

所が仕事が手間取つて、その中に日が暮れてしまい、果わ自分の持つて居る斧まで、よく見えない程暗く成りました。

すると爺さんわ空を仰いで、

『あゝ、こう云う時にお月様が出て、一寸でも光明を見せて下ださりやア、私わ何でもお禮をする大切な二番娘でも、直にお嫁様に上げるがなア。』

と、獨語を云いますと、それをまた山の陰で、お月様がお聞きになり、

『面白い！　それでわ私が明るくしてやろう。』

と、急いで山から上つて、森の中をお照らしなさいました。

所え二番娘が、提灯を持つて迎いに來まして、

『阿父さん！〳〵！　暗く成つてさぞ困るだろう。私が燈火を持つて來ましたよ。』

と、云いますと、

『イヤ、その親切わ嬉しいが、もうお月様がお出でに成つたから、提灯なんぞわ入らないよ、その代りそのお禮に、お前わお月様の所え行くんだ。』

と、云う中にもうお月様も、雲をお迎にお寄越しに成つて、直ぐとこの二番娘を、自分の側えお連れに成りました。

こう云う風に百姓爺さんわ、自分の大切の三人娘の、一人わお太陽様の所え嫁附け、一人わお月様のお嫁様に上げまして、あとわ三番娘一人に成りました。

その中に時が經つて、今度わ夏の土用に成りました。

ある日爺さんわ、野え出て草を刈つて居りましたが、何しろ夏の日中の事で、而も陰がありませんから、暑くて〳〵たまりません。

すると爺さんわ、額の汗を拭きながら、

『あゝあ、こう云う時に風の神が、ちつとでも吹いて下ださりやア、私わどんなに助かるだろう。私わほんとにそのお禮にわ、たつた一人殘つて居る、大切の三番娘でも、直ぐに上げてしまうのだが……』

と、空を仰いで嘆息しました。

それをまた森の陰で、風の神が聞きますと、直ぐにソヨ〳〵と吹き初めました。

所で三番娘が、團扇を持つて來ましたが、

『阿父さん〳〵！　さぞ暑いでしようねエ。私が扇いであげましよう。』

と、云いますと、爺さんわ頭を振つて、

『イヤ、もう團扇わ入らなく成つたよ、何しろこんな好い風が來るのだもの、だがお前わその代りに、風の神様のお嫁に行つてくれ！　今お約束した所だから。』

と、云うかと思うと風の神わ、もう自分で吹いて來て、直に三番娘を連れて行つてしまいました。

此處で爺さんわ、娘を三人共皆お嫁に遣りまして、大きに安心しましたが、それから二三箇月經ちますと、そろ〳〵三人が戀しく成りました。

『あゝして三人共、皆好い所に嫁附いて、こんな幸福な事わ無いが、それにしても娘達わ、何うして暮らして居るであろう？』』

と、思うと氣になつてたまりませんから、或る日婆さんに向いまして、

『婆さんや！　今日わ好い天氣だからナ、私わ是から婿殿の所え、遊びに行つて來ようと思う。よく留守をして頼むよ。』

と、爺さんわ支度をしまして、まづ最初にお太陽様の所え行きました。

婿殿のお太陽様わ、爺さんを見ると喜んで、

『やア、これわ阿爺さん！　よく來て下ださいました。何もお愛想がありませんが、今手製のカステラを上げましょう。』

と、云うかと思うと、お嫁さんに云いつけて粉を練らせ、夫を自分の額に載せて、暫時頭を振つて居ると思うと、見事なカステラが出來上りました。

爺さんわこれを御馳走に成つて、大層甘がつて居りましたが、やがて家え歸つて來ますと、婆さんを呼びまして、

『今日私わお太陽樣の所で、甘いカステラを食べて來た。お前にも一つ御馳走をしてやるから、はやく粉を練りなさい！』

『でも道具が無くてわ仕方が無いぢやありませんか。』

『なアに道具なんぞ入るもんか。こうすりやア直き出來るんだ。』

と、婆さんを急き立てゝ、粉を澤山練らせまして、それをいきなり自分の額え、さつとあてて見ましたが、どうしてカステラが出來る所か、練つた粉が顏中に垂れて、眼も鼻も閉がる許り、いくら拭いても取れませんで、この爲に爺さんわ、三日三夜お湯に入つて、洗いつづけなければ成りませんでした。

それから一月經ちますと、爺さんわまた家を出て、今度わ二番娘の婿殿の、お月樣の所え尋ねて來ました。

お月樣わ大喜びで、

『オヤ、阿父さん！　よく來て下ださいました。丁度昨日出來た甘露酒があるから、あれを一つさし上げましよう。』

と、お嫁さんと一所に穴藏え出かけましたが、穴藏の中わ眞暗なのに、誰も燈を持ちません。只お月樣が御自分の指で、壁をスウツと擦つた許りで、パツと明るくなりました。

此所でまた爺さんわ、甘露酒を澤山御馳走に成つて、家え歸りますと、いきなり婆さんを捕えまして、

『婆さんや！　今日わ、お月樣の所え行つて、私わ好い事を覺えて來たよ。さア、私と一所に穴藏え行きなさい！』

『でわ、暗いから提灯を持つて行きましよう。』

『イヤ、提灯なんぞ入るもんか！　私わ指から光明を出して見せる。』

と、婆さんを連れて穴藏え行き、

『さア、見なさい！　明るく成るぞ！』

と、指でしきりに壁を擦りましたが、どうしても光明が出ません。その中に二人共、穴藏の段を踏み外づして、向脛を擦り剝きましたから、驚いて部屋え歸つてしまいました。

さて又一月經ちますと、爺さんわまた、三番娘の婿殿の、風の神の所えやつて來ました。

其時わ丁度日中でしたが、風の神わ爺さんを見ますと、

『イヤ、阿父さん！　よくお出でなすつた。だが此處わ暑いから、暫時水のうえで涼みましよう。』

と、云いながらお嫁さんに云いつけて、大きな風呂敷を持つて來させ、これを池の上え浮かせまして、さア入らつしやいと云いながら、皆でその上に乘りましたら、まるで船に乘つた様に、水の上を行つたり來たりして、何とも云えない好い心地でした。

爺さんわ此處て面白く遊んで、それから家え歸りますと、また婆さんをつかまえまして、

『どうだい是から、二人で納涼に行こう。』

『でも船が無いぢやありませんか。』

と、云うのを、

『ナニ、船なんぞ入るもんか。これさえありやア澤山だ。』

と、大きな風呂敷を持ち出して、婆さんと一所に川え行き、まづ風呂敷を水に浮かして、その上に二人で乘ろうとしましたら、忽ち水の中えボチヤンと落ち、二人共濡鼠の様に成つて、漸く這い上りました時にわ、もう風呂敷わ風に吹かれて、何處かえ流れて行つてしまいました。

若がえる

今年も〳〵う十二月になりました。もう一ト月でまたお正月になります。そうすると、誰もまた一つ年を取るのです。

『ア、、いやだ〳〵、またお正月が來るのだよ。だんだんお婆さんに成つちまうんでねエ。』

と、隣の婆さんわ、毎日の様に鏡にむかつて、顏の皺を寫してわ、こんな事を云つてこぼして居ました。

太郎わ此方から見て居て、氣の毒でたまりません。ある日やつて來まして、

『小母さん〳〵！　又鏡を見てるんですネ。』

と、云いますと、婆さんわきまり惡そうに、

『オヤ、見つかつたかネ。』
『そんなに鏡斗り見てると、尚お婆さんに成りますよ。』
『それわ困つたねエ。そんなら何うしたらお婆さんに成らないか知ら？ むかしのお話なんぞにわ、よく若くなる水があつたり、死なゝいお薬があつたりするが、ほんとにあると可いんだけどもねエ。』
と、眞面目になつて云いますから、太郎わ考えまして、
『そうだねエ。探したらほんとに無い事も無いでしよう。』
『あるなら一つ欲しいもんだネ。』
『そんならお待ちなさい。私何所かで買つて來るから。』
と、又其所を飛び出しましたが、元より怜悧な太郎ですから、直きにうまい工夫を考えました。
で、町え出て待つて居ますと、其所をいつもの薬賣が通りました。
『薬屋さん！ 笑薬をおくれ！』
と、云いますと、薬屋わ立ちどまつて、
『笑薬？ そんな物何にするんだ？』
『何でもいゝから賣つとくれよ』

『よし、それでわこれをあげよう。』
と、小さな袋をくれました。
太郎わそれをうけ取ると、
『それから躍り薬わ無いかねエ？』
『おどり薬？ 變な物斗り欲しがるぢやないか。』
『でも要るんだから……』
『よし、それぢやアこれを持つてきなさい！』
と、また躍り薬をくれました。
太郎わこの二品を買うと、急いでまた婆さんの所え來ました。婆さんわ待ちかねて居て、
『どうしたエ、太郎さん！ あつたかエ？』
『あつたとも。上等なのがあつた。これさえ食べればどんな老人でも、直ぐに若くなつちやうんだよ。』
と、云いながら出しましたが、わざと袋わ取つておいて、名の知れない様にしておきました。
婆さんわ一寸考えて、
『これかエ……これ何と云うお薬なの……』
と、まだ信用しないようですから、太郎わ眞面目な顔で、

『だから若くなるお薬なんだよ。』

『でも、名わなんと云うんだろう?』

『名かエ……そりやア聞いて來なかつたけども、若くなるお薬をくれツて云つたら、これを渡してくれたんだ。』

『でも二つあるぢやないか。』

『兩方とも然うなんだよ。そうして代る〳〵に飲むといゝんだとさ。』

『そうかエ。ぢやア早速いただいて見ようか。』

『はやくおあがりよ。だが、……そのお薬を食べてしまうまでわ、鏡を見ないで居る方がいゝよ。』

『だつて氣になるから見たいぢやないか。』

『いゝ時分にやア私が見せたげるから、それまで我慢して見ないどいで!』

『ぢや仕方がない。鏡わ其方向けとこう。』

と、後向きにおき直しますと、其所え太郎わ、湯呑にぬるいお湯をついで來て、

『さア小母さんおあがんなさい!』

『どうもすまないネ。ぢやアいただくよ。』

と、婆さんわまづ笑い薬の方を、口に一杯ほうばつて、グツとお湯で呑み込みました。

太郎わじつと其の顏を見て、

『どうだイ。苦いかイ?』

『さうだねエ。何ともない樣だよ。』

と、婆さんわ眼をつぶつてしばらく考えて居ましたが、やがて何と思つたか、クスリクスリと笑い出し、果わ大きな聲を出して、

『ハヽヽヽ、アハヽヽヽ、オホヽヽ、ホヽヽヽ、ホヽ。』

と、お腹を抱えるでわありませんか。さてわ藥が利いたなと、太郎も一所に笑いながら、

『こりや面白い。小母さん何がそんなに可笑いんだよ?』

『何がツて、アハヽヽ、こんな可笑しい……ホヽヽヽ、アハヽヽ、アツハツハツハツ!……あゝあんまり笑つたら! アハヽヽ、おゝお腹が……いた……オホ、いた、ウフ……いたくて……へヽヽヽヽ、』

と、しまいにわ轉がり出しました。

『コレ〳〵小母さん、しつかりおしよ?』

『しつかりするツて……こんな、アハヽヽ、こんなアハヽヽヽ、お、お、おか、アハヽヽヽ、おかしい事わ、アハヽヽヽ!』

と、又しても引くりかえりますから、

『おまち〳〵! 今度わ此所を飲んでごらん?』

と、おどり薬の方をのませました。

婆さんわ夢中になつて、それもグツと飲みますと、今度わ又飛びあがつて、

『これわ面白い〳〵、……またお正月が來るんだネ。こんな嬉しい事わない。面白いから躍るんだ。躍れ〳〵！　ヤ、コリヤ〳〵！』

と、家中浮かれておどりまわります

先刻からさんざ笑つた揚句、又おどり廻つたものですから、婆さんすつかり熱くなつて、衣服までぬいでしまつて、若い者の様に薄着になつてしまいました。

その時太郎わ婆さんを抱き止め、鏡を又むけ直して、その前に据らせましたから、婆さんわさも嬉しそうに、

『オヤ私……すつかり若くなつてしまつたよ。』

小波お伽全集　第九巻

少年教訓集

終

昭和八年九月二十日印刷
昭和八年九月三十日發行

小波お伽全集　第九巻
少年教訓集　奥付

不許複製
巖谷

定價金三圓

著作者　巖谷季雄　東京市芝區高輪南町五三番地
編輯者　木村定次郎　東京市代々木初台五六二番地
發行者　吉田百邦　東京市深川區常盤町二ノ一番地
印刷者　大西久八　東京市芝區田村町六ノ三番地

發行所　東京市深川區常盤町二ノ一番地　吉田書店出版部　小波お伽全集刊行會　電話本所七一六番　振替東京三九八六六番

562
114